

史料と伊能図

伊能忠敬

研究



二〇〇一年 第二五号
伊能ウオーク特集

伊能忠敬研究会

表紙図解説

須賀田氏蔵 天の橋立図 部分

第5次測量地域の景勝地を描いた、大縮尺で風景図的要素の強い図を特別地域図と呼んでいる。琵琶湖図(108000分の1)、厳島図(360000分の1)、天の橋立図(120000分の1)の3図が現存している。本図は伊能家の縁戚の須賀田家に伝えられている天の橋立図の部分である。宮津城が美しく描かれた絵画風の図である。特別地域図のなかでは一番大縮尺で絵画的である。

大谷亮吉『伊能忠敬』によると「第5次測量の地域内には景勝地があるので、忠敬は適宜の縮尺をもって描出した地図を製して官庫に上呈し、また権門知友等にも頒ちたるものの如く、この種地図の現存する物少なからず」というが、実態はそうとはいきれない。

測量日記によると、作業が遅延しているにも拘わらず、そういう目的で作業されたようであるが、特別地域図の現存数は意外に少ないのである。本図は伊能忠敬記念館と須賀田家の他には存在を知られない。最近の伊能図新発見にも縁がない。

思うに特別地域図は謹呈用にと美しく仕上げたが意に反して希望が少なかったのではないか。諸侯等の関心は謹呈用のお飾りの伊能図よりも、本物の伊能図に向けられた気がする。現存数が最も多いのは文化元年の小図である。

(題字は伊能忠敬の筆跡)

目次

(表紙写真解説) 目次

巻頭エッセイ

鈴木全一

一

「伊能ウオーク完歩」に寄せて

伊能ウオーク特集

伊能ウオークが完了しました

伊能ウオークの二年間を振り返って

伊能忠敬研究会五年間の歩み

伊能忠敬子ども調査隊

伊能古文書教室7 佐原邑河岸一件(三)

伊能忠敬の房総沿岸測量(三)

伊能忠敬と刀

伊能忠敬と八王子千人同心

芳名録より

ドラマ制作者への参考・感動の五〇場面

人間・伊能忠敬の生涯(私稿)

伊能忠敬史蹟めぐり1

「両館山の伊能忠敬碑」

地域史料紹介

対馬藩宗家文書『測量御用記録』(二)

伊能忠敬の江戸在住日記(五)

お知らせ 伊能忠敬銅像建立基金御寄付のお願い

裏表紙 英文目次

小島一仁 二二
渡辺孝雄 二七
安藤由紀子 三二
加藤巷児 三六
伊能陽子 三九

渡辺一郎 四〇

加藤巷児 五〇

入江正利 五一

佐久間達夫 五六

六一

「伊能ウオーク完歩」に寄せて

鈴木全一

一九九九年一月二五日、世紀越えの壮大なロマンを秘めて「伊能ウオーク」が江戸東京博物館を出発しました。日頃、健康に自信があつた私ですが、その冬流行したインフルエンザでダウンしてしまい、腹痛と倦怠感で出発を見送るのが精一杯だったことを覚えています。

その夏、塩尻、松本、明科間、二日間のデイリー隊として、長女と一緒に初の参加を果たすことができました。前日は塩尻峠越えの難コース、一日のずれで平坦なコースを、しかも飛驒のすばらしい山並みを見ながら歩けるなんて、とてもラッキーでした。地元の方が、あれが槍ヶ岳、穂高、常念岳・・・と丁寧に説明してくれました。休憩地点で食べた、冷えたトマト・西瓜の味、日照りのなかを歩いて乾き切った喉にしみ込むみずみずしい甘さは、一生忘れられません。

一日目の終点、松本城に入場。有松松本市長と松本太鼓の響きの大歓迎を受け、感激しました。その晩は浅間温泉で一泊。この年の秋、長女は結婚、父と娘の二人きりの最初で最後の一夜を過ごすことができました。

二〇〇〇年五月、徳山―防府間二度目のデイリー隊に参加、河村徳山市長、松浦防府市長と一緒に歩くことができました。一号国道を交差しながら旧道を歩き、瀬戸内の美しい景色を満喫。見知らぬ人や風景との出会い、楽しい会話、人情厚いすばらしい人々との一期一会、道、風景との一期一会、自分の足で確かめながらの思い出ができました。

二年間の長くて短い「伊能ウオーク」は二〇〇一年一月元日、日比谷公園でフィナーレを迎えました。寒風の中、野外ステージを埋め尽くした人々の熱気には、それぞれの思い出を残してくれたウオークへの『ありがとう』の感謝の心を感じました。わが郷土の偉人を称える伊能ウオークを企画、参加、そして支え続けてくれた多くの方々に心から感謝いたします。大内隊長始め本部隊の皆様、一一〇三〇キロの完歩お疲れ様でした。

翌二日には本部隊員を佐原にお迎えし、関係者と佐原市民のラスト・アンコール・ウオーク、忠敬旧宅から市役所へ感激の二一世紀を飾ることができまして、ありがとうございました。自治体の首長のサイン入り伊能小図は大切にお預かり致します。

二〇〇年という歳月を経て今の世に忠敬翁の志と偉業を伝えることの大切さ。ウオークは終了しても、また新たな企画を楽しみに伊能忠敬研究会の益々のご活躍を期待いたします。

(すずき・ぜんいち 千葉県佐原市長)

伊能ウオークが完了しました

世紀の大イベントだった伊能ウオークが完了しました。朝日新聞の各県版はウオーク通過中、毎日報道しましたから、伊能忠敬の名前はウオークの道筋には特に強く印象づけられたでしょう。

研究会の活動、ラストウオークの状況などはを、かわら版号外で速報しましたが、朝日新聞社提供の写真などを含めて、再構成してみました。

横浜大会

年末の30日には横浜の国際ホテル、パシフィコ・ヨコハマを出発点として約10キロの横浜大会が開かれました。2000人弱が詰めかけ、研究会からは川上、福田、伊能陽子さん一行、渡辺夫妻、矢能、坂本さん一家三人など十数名が参加しました。出発式来賓には宇宙飛行士の毛利衛さん、漫画家のサトウ・サンペイさんをはじめ、土地家屋の会長さん、測量設計業協会の会長などがずらりと並び、主催者側は朝日新聞の東京本社代表、加藤名誉隊長、渡辺代表などでした。毛利さん、サンペイさん、加藤剛さんの挨拶をうけ、ゲストを先頭に10キロコースを歩きました。

毛利さん

の歩きながらのお話は大変面白く伺いました。宇宙飛行士はアメリカには150人いるが日本はまだ8人で、いま3人アメリカにいつているとか、現在宇宙ではいつも交代で3人生活していて、4ヶ月で交代するとか、栄養的に問題はないが野菜が恋しいとか、排泄物の液体は浄化して放出し、固体は包装して持ち帰るとか、火星に出かけるには、まず帰り用のロケットを分解して少しずつ運んで、組

み立てて置かなければならないとか、通信ではこちらの話があらに届くの19分かかる、などという面白い話をしてくれました。

最終報告会

ウオーク終了後、パシフィコ・ヨコハマの1000名収容の大ホールで伊能ウオーク最終報告会が開かれました。毛利さん、サトウ・サンペイさん、加藤剛さんの講演、挨拶のあと全本部隊員がひとりづつ報告をおこないました。みんな自分の体験から溢れ出た言葉なので聴衆の心に迫るものでした。ホールは整理券を発行していましたが、ほぼ満席でした。

歓迎会

夜は山下公園の氷川丸で、伊能ウオーク・サポーター・クラブ、神奈川県土地家屋調査士会、神奈川県測量設計業協会主催の歓迎会があり、本部隊、ステージ隊が招待されました。野々村運営委員長挨拶、加藤剛挨拶で開宴。渡辺代表は来賓挨拶をいたしました。

完歩前夜祭

31日の横浜から川崎ウオークは約1500名で、到着の川崎市役所はごった返していました。あと、駅前の川崎日航ホテルで本部隊、エリア隊、ラスト・スリーデイ隊と関係者による完歩前夜祭がありました。約400名の大パーティでした。指名により渡辺代表理事が主催者を代表して挨拶し、日本ウオーキング協会・田中会長の発声で乾杯。長い挨拶なしですぐパーティとなり盛り上がりました。研究会からは伊能洋・陽子、安藤由紀子、斉藤仁、矢能彰、垣見壮一、川上清の各氏が参加しました。

元日のウオーク

東京日比谷公園の到着式場への最終パレードには約4000人が参加しました。三原橋から警備会社の女子儀仗隊4

0人のプラスバンドを先頭に、主催3団体の旗、VIP、本部隊、ステージ隊、エリア隊、伊能ウオーキング後援会員、一般隊員と続き、そのあとに、御協力をいただいた団体の土地家屋調査士会400人、測量設計業協会150人、月星化成㈱、協賛会社チームなどが約200人毎のグループを作り、プラカードを立て続けました。

研究会グループ

最後が主催者団体です。伊能忠敬研究会は会員約40人が出て、佐原市(市長以下80人)、横芝町(町長以下21人)、九十九里町(町長代理・収入役以下41人)と一緒に、なってグループを作り、主催団体の先頭を歩きました。会員は例の黄橙色の帽子を被り、先発の川上清、神保誠、矢能彰、垣見壮一の各氏は研究会旗を持って川崎から歩き、品川で伊能洋、清水弟(朝日新聞)、清水建宇氏(ニユース・ステーション担当朝日編集委員)など10数名の会員を加え、竹芝埠頭で前記の編成をおこないました。

当日役員は、全ウオーキング隊の先頭旗手は川上、坂本の両氏が交代で務め、川崎組の役員は川上氏、品川組の役員は福田氏、竹芝組の役員は土肥氏、伊能陽子氏の2人が担当しました。また研究会と1市2町グループの「しんがり」は福田、清水(靖夫)、斎藤(仁)、の各氏にお願いしました。

日本ウオーキング協会

研究会グループのつぎは、主催団体の主力・日本ウオーキング協会で、千葉、東京、神奈川、埼玉、その他の各県協会の大部隊約1000名が続きます。研究会のすぐ後ろは、本部隊・大内隊長の出身母体の「船橋歩こう会」でした。

最後は伊能ウオーキング・サポーター・クラブと朝日新聞社員グループです。朝日の本社前で出迎えたあと、最後尾に付きました。各グループ

にすべて手を振って歓迎するのは大仕事だったでしょう。

隊列の先頭

後方の研究会グループ方々には、先頭のプラスバンドとか、隊列は全く見えませんでした。が、渡辺総隊長は3団体の会旗に続いて、VIPグループの先頭を東京都ウオーキング協会の熊切会長と並んで歩きました。

箱島朝日新聞社長、中江朝日新聞社顧問(前々社長)、協賛各社の代表などと御一緒でした。やや離れて本部隊が続く、加藤剛名誉隊長、漫画家・サトウ・サンペイさんが大内隊長とならんで本部隊の先頭を歩きました。本部隊はお馴染みの横断幕を張って行進しました。

三原橋から日比谷

晴海通りの車道・片側半車線を使い、多数の警察官とウオーキング協会役員が沿道の警備に出て、整然としたパレードでした。全員が通過するのに1時間弱かかりました。

到着式典は3000人以上収容できる日比谷公園野外音楽堂でおこなわれました。本部隊、ステージ隊とVIPを壇上に迎え、主催者を代表して朝日新聞社・箱島社長の挨拶、来賓・沼田千葉県知事の挨拶などに続いて、江橋実行委員長(日本ウオーキング協会名誉会長)の完歩証贈呈、日本ウオーキング協会・田中会長から国土地理院長に感謝状贈呈、朝日新聞社・東京代表から日本土地家屋調査士会連合会長に、伊能忠敬研究会・渡辺代表理事から全国測量設計業協会会長に感謝状贈呈などをおこなったあと、AKIRAの歌で式をおわりました。

「榎の木広場」

日比谷公園の「榎の木広場」には佐原市から甘酒1500人分、お米(3合入り)2000袋、土地家屋調査士会から「おしるこ」2000人分と「お神酒樽」などが提供され、到着式終



三原橋から日比谷公園まで、晴海通りを進むパレードの先頭は、大庭隊員(伊能忠敬研究会所属)の随伴車と、総合警備保障株式会社の女子儀仗隊のプラス・バンドでした。赤いユニフォームがたいへん目立ちました。 朝日新聞社提供

了後、振舞われましたが、あつという間に無くなってしまいました。最後まで式場にいた方には、ほとんど当たらないという騒ぎでした。ただことではない人数でした。

富岡八幡から佐原市へ

1月2日には8・30より深川の富岡八幡宮で報告祭をおこない、拝殿内で総隊長の拝礼のあと、隊長と一同が揃って拝礼しました。9・30佐原市のバスで佐原に向かい、431人の首長さん署名入りの伊能小図献呈式が行われました。

伊能忠敬記念館に11・00頃つきましたが、佐原市民約500名が伊能忠敬記念館に出迎えました。本部隊は20分間記念館を見学。西野館長の司会で出発式のあと、佐原市役所まで2キロの歓迎ウォークを行いました。

市職員の先導で、佐原市長、渡辺総隊長、市会議長、大内隊長以下の本部隊、一般市民の順で続きました。交差点には警官も整理に出て延々長蛇の列でした。会員の伊能静光さん、伊能洋・陽子夫妻、他の伊能一門も多数出迎えました。伊能忠敬記念館隣の伊能茂左衛門家御夫妻が羽織袴の和服に威儀を正して記念館玄関前に出迎えられ、びっくりしました。記念館の敷地はもと茂左衛門家の所有でした。

伊能小図献呈式

市役所ホールの献呈式では、渡辺代表理事から市長に首長署名入りの伊能小図を献呈し、千葉県土地家屋調査士会長から、全国を持ちまわった伊能大図目録が渡され、大内隊長からは2年間の風雪にさらされた御用旗が市長に献呈されました。

あと、日本ウォーキング協会と本部隊員を代表して大内隊長、伊能忠敬研究会・渡辺代表理事、朝日新聞伊能ウォーク事務局・遠藤事務局長と日本土地家屋調査士会連合会・水上会長に佐原市長から感謝状

と記念品の贈呈があり、日本ウォーキング協会・田中会長の解団宣言があつて献呈式を終了しました。

歓迎パーティー

式後、5階会議室において歓迎会が開かれ、市長、市会議長の挨拶のあと、来賓として谷田川県会議員、渡辺代表理事の挨拶があつて開宴となりました。佐原市の幹部、伊能忠敬研究会佐原支部有志、伊能家の関係者などが多数参加しました。鈴木佐原市長がみずから本部隊員に豚汁などを運んで大サービスでした。

帰途はふたたび佐原市のバスで東京駅まで送ってもらいました。正月のことで高速道路は大渋滞でしたが、車内は盛り上がりしました。夕刻、到着後、各隊員は去り難い思いを抱きながら解散しました。



感謝状

貴団体は佐原市に生じた先賢伊能忠敬翁の足跡を平成の伊能忠敬ウォークに当り事業の企画立案から全国踏破に至るまで種々尽力され翁の偉業を佐原市を全国に広げられた功績は誠に多大であります。よってここに深く敬意と感謝の意を表します。

平成十一年一月二日
佐原市長 鈴木全

佐原市から研究会へいただいた感謝状です。同様な感謝状が日本ウォーキング協会、朝日新聞社と本部隊員各位に贈られました。



パレードの先頭は、日本ウオーキング協会、伊能忠敬研究会、朝日新聞社の旗を立てて進みました。中央は渡辺総隊長。（朝日新聞社提供）



伊能忠敬研究会チームのパレードです。佐原市、横芝町、九十九里町と一緒に、約200名のグループを作り、主催者隊列の先頭を歩きました。(朝日新聞社提供)

伊能ウオークの二年間を振り返って

編集部

○伊能ウオークの出発は九九年一月二五日でした。朝日新聞の創刊記念日が一月二五日だったので、この日に江戸東京博物館で出発式をおこない、忠敬が測量に出かける前に必ず参詣した富岡八幡宮に参詣、五街道ウオークに出かけました。

多数の会員各位に出発式、富岡八幡までの見送りウオークに御参加いただきました。参加総数は、出発式は2000人、富岡八幡へは800人とアナウンスされました。

寒い一月に北に向って歩いていただくのは、コース原案を作成した研究会としては、大変、申し訳なかったのですが、全都道府県一筆書きということ、伊能忠敬の測量線を忠実になぞる、ということと考えたとそれしかありませんでした。

各県で土日に、一・二回は大会を開くことが計画され、さしむき千葉市ということでしたが、二五日から直接千葉に向うと早く着きすぎます。そこで、東京都内を各方面に向かつて五街道ウオークと称してデモンストレーションしました。

このお蔭で、東宮御所前を通過のとき、皇太子御夫妻のお見送りをいただきました。大内隊長は皇太子殿下と、渡辺総隊長は妃殿下とお話することができました。

○研究会がらみで一番印象が深いのは何といっても、伊能大図展です。伊能ウオークの進行とともに伊能忠敬をアピールするのは、研究会にとって大きな狙いです。「大図の複製を富士写真さんをお願いして展示

しながら歩いたら」「それはいいね」大賛成したのですが、出来上がったみると、運搬、展示の体制が全くありませんでした。

はじめの頃は本部隊は歩くだけでせい一杯。とても大作業の余力はありません。伊能教室の展示パネルや、中国の展示を手伝ってもらうのがやっとでした。

千葉県千倉の展示はウオーキング協会と研究会が人を出し、地理院から指導に出て実現したものでした。展示終了後は置く所がない、というような始末でした。現場から佐原の伊能忠敬記念館に交渉して、預かってもらう話をつけ、ウオーキング協会の木谷専務がみずから上乗りして運んだ、というような記憶があります。

ところが、宮城県の土地家屋さんが自主行動で動き出して伊能図展を引き受けていただくことになりました。主催者のしかも伊能忠敬事績を守備範囲とする我々にとつては、本当にありがたいお話でした。あと、専用の車両を購入されて各県持ち回りで、百二十七回もの伊能大図展を開催していただきました。厚く御礼を申し上げます。

伊能図は今までも、これからも特別な方以外は直接見ることはありません。今回の展示はウオーク最大の併催イベントとして、多数の識者に強烈な印象をあたえました。

土地家屋さんの立場で考えると、伊能図展が看板板でした。そして裏方の湯茶接待も徹底して行っていたのはありがたいことでした。全県参加というのもよかったと思います。

各地の研究会員の動き

○伊能教室のキツカケは吉野さんでした。資金を募り、測量機器の写真や測量ルート図などを借り集め、イーゼルを買ってもらって、第1回の伊能教室を市川公民館で開きました。



江戸東京博物館講堂の出発式。本部隊員一同整列し、加藤名誉隊長が御用旗を持っている。出発の挨拶は渡辺総隊長。(朝日新聞社提供)

○星弘代さんのご主人は千倉の能蔵院御住職ですが、本部隊のために完歩祈願の護摩祈禱を修行していただきました。終ってから庫裏でお寺の役員さん達の手でおしる粉を御馳走になりました。

○水戸大会では千波湖の周辺で、茨城県測量設計業協会主催の歩測大会が開かれました。こんど全国測量設計業協会会長になられて鈴木会長が総指揮でした。水戸史学会の会長さんと渡辺代表が出て講演会もありました。茨城県のコースリーダーは、このあと入会された川上清さんが勤めました。

○永野達代さんは、高萩市役所のミニ伊能展を仕掛けてくれました。旧知の長久保赤水御子孫の方と組んで、新沢君が運んでいる伊能教室の資料を市役所入り口に展示しました。初めてNHKが取り上げて関東各地で放映されました。

到着式のあと、渡辺代表は長久保赤水顕彰会の幹部約30名の前に赤水と忠敬の位置づけについて講演。赤水と忠敬のどちらが偉いというような議論に終止符を打ちました。

○渡辺代表、高萩から北茨城まで完歩。北茨城市の河井明子さんは伊能家の縁戚ですが、医師の御主人の車椅子で市役所に出迎え。刺身の大皿を幾皿も差し入れていただきました。よほど立派な盛り合わせだったらしく、あとでも話題になりました。現場にいた川上さんからその通りだったとお手紙をいただきました。

○伊能隊学芸員の新沢君主催・伊能教室第1号は宮城県山元町の山

下第二小学校でした。朝日新聞全国版に掲載されましたが、現場にいた金井カメランの話ではなかなかのものだったとのことでした。

彼は第5ステージでは積極的に休憩場所の小・中学校で伊能図を広げて伊能教室を開催、20箇所以上でお話をしました。山陰の浜田近くの周布小学校で歩測大会をしているところを渡辺代表が実見しましたが、盛会でした。伊能教室は、本部隊の中山翠会員も、元中学校長の野依本部隊員と組んで開いてくれました。

○芳賀さん。和装・わらじ履きで八戸を歩きました。

○盛岡の渡部さん、土地家屋調査士会さんと組んで講演会を開きました。斎藤仁さんも盛岡に出ました。

○伊能洋・陽子さん函館大会へ。函館土地家屋調査士会会長の「斉藤サダ」と知り合い、サダさん入会。斉藤さんはこのあと、新国立劇場の「伊能忠敬物語」観劇会、ラストウォークな



江戸東京博物館を出発し、加藤名誉隊長、渡辺総隊長、大内隊長、柳生副隊長を先頭に富岡八幡宮に向かう。(朝日新聞社提供)

本部隊・新沢学芸員(会員)の伊能教室風景(朝日新聞社提供)



どに参加しました。

○札幌では、忠敬と伊能ウオークを北海道新聞の記事にしてもらおうと、高木会員の案内で、渡辺代表と国土地理院の長岡部長(当時)で北大伊能図の調査をおこないました。本部隊員も同行。PRがよく効いて伊能図展に500人集まりました。高木さんは、札幌大会では奥さんとお二人で研究会の旗を持って歩きました。

○99・6・20 ちくま新書「伊能忠敬の歩いた日本(渡辺一郎著)」発行。ちくま書房。初版12000部。

○民俗学者・本草家の菅江真澄研究会理事で、元秋田県立博物館長・田口昌樹氏の秋田市内のお宅へ、「井上ひさしさんの小説の中のご縁ですが一緒に歩きませんか」とお電話をしましたら、すぐに機関誌でウオークのコースを入れて呼びかけて下さって、実数は分かりませんが、かなりの数の真澄研究会が広い秋田県下で参加されたとのことです。当日、田口さんは真澄に扮して一行を出迎えてくださいました。

○山形県村山市では、佐藤市長と日歩協・木谷専務が旧知の間柄でしたので、市長以下ほぼ全職員が真夏のような日差しのおかげ十分も一行の到着を待ち、市長みずから最上徳内記念館の案内をしてくださいました。

平日でしたがパネル展、大図展、地図コンクールが併催され、シーボルトと「アイヌ語辞典」を共同編纂し、シーボルト著「NIPPON」のなかで、「18世紀における最も卓越した日本の探検家」と賞賛された北方探検家・最上徳内の出生地にふさわしいものとなりました。

○あの偏屈で負けず嫌いな司馬江漢が「日本に生れし和蘭陀人」と忠敬に語ったというエピソードが残っている銅版画家で、洋風画家・亜欧堂田善の出身地福島県須賀川市では、石井千寿子会員に田善の顕彰活動をしている商工会議所青年部の大野修司氏を紹介して頂きました。氏のご尽力と市役所、市立博物館のご協力により、高橋景保・亜欧堂田善作「新訂万国全図」を市役所に展示し、また田善の作品を多数もつ博物館を一行に無料解放して頂きました。(以上の三件は永野達代さんからのレポートです)

○渡辺代表、福島で講演。開演の前に日本土地家屋調査士会連合会水上会長に御挨拶することができた。

○伊能陽子軍団、各地を歩く。伊能さんは顔が広い方ですが、大庭本部隊員の奥さんとお友達を誘って各地に出かけました。少ない時でも数名、多いときは10数名のおばさん軍団でした。千倉を皮切りに、前橋、長崎、沖縄、松江、静岡、小田原、横浜などでした。

○所沢の到着に井上靖子、伊能陽子さんが出てビールを差し入れしました。井上さんは六代目伊能康之助さんの長女で、伊能家の旧宅で生まれた方です。伊能の縁戚が所沢に住んでいると聞いて市長さんが驚いたそうです。

○埼玉から八王子、山梨へのコースに2080人歩きました。「埼玉歩け」と「東京都歩け」が呼応して大人数になりました。渡辺代表は到着式に出ましたがものすごい人数でした。朝日販売店が缶ビールを振る舞い、土地家屋さんは高野理事が総指揮官になって大動員をかけ

て、河原でパーベキュウ・パーティを開いてくれました。この参加人数記録は最終ゴールまでとうとう破れませんでした。

○佐渡および新潟市(信濃川の河原)で新潟支部の垣見さんが中心になって、測量設計業協会と連携して歩測大会を開きました。大会では専門の測量屋さんが設営し、大内隊長以下の参加者は歩測大会のゼッケンをつけて歩きました。河原の芝生の上でゼッケンが浮き立ち絵になりました。中山本部隊員が名人に入賞しました。

海岸では、海上保安庁から借用した六分儀を使って、西川本部隊員の紹介で海上保安本部職員から天測の講習をうけました。また、市立科学館の御協力をいただいて天文教室を開き、忠敬が観測したと思われる星について説明をうけました。

○新湊博物館では伊能ウオークの通過にあわせて、渡辺代表が同館所蔵の伊能小図の調査をおこないました。伊能小図の彩色なしの写し(一部欠)と判定しました。富山新聞、朝日新聞が取材して、伊能ウオークとともに大きく報道されました。富山の土地家屋調査士会では富山新聞1頁の全面広告を打って伊能ウオークをPRしているのが目立ちました。

○七尾、金沢では石川の土地家屋さんが頑張りました。七尾では渡辺代表と野々村前国土地理院長の講演と地図展。石川では早くから、河崎倫代さんが、この機会は一生に一度のチャンス、何もしなかったら悔いを残すと、土地家屋さんをスポンサーに、加能史学会と連携して講演会と伊能図の説明会をセット。渡辺代表と伊能陽子さんが頼まれて講演に出ました。

○奈良大会。渡辺代表、出発式出席と講演。

○九九年一二月、劇団俳優座、新国立劇場で演劇「伊能忠敬物語」を上演。佐原、横芝、九十九里の人々と研究会会員を合わせて約200名観劇。

○大坂の大会には渡辺代表、安藤さん、伊能さんと関西支部の原田、荻原、中尾、藤原、中尾、三輪氏ら10数名出席、一緒に歩いたあと、懇親会。

○渡辺代表、山口県文書館で「講演と毛利家大図展」の講師を務める。参加250名で講堂ほぼ満席でした。県教育長が最後まで聴講されました。

○「赤穂の見学と伊能ウオークの会」を開く。赤穂駅に集合、見学のあと、一同市役所で到着を待つ。到着時に坂越の佐方さんに伊能隊に提出した村絵図控えの展示をしていただいた。御崎の簡保の宿に宿泊。瀬戸内の家島に面する景勝地の豪華な宿でした。

○翌日は雪。渡辺代表は主催者挨拶のあと、大内隊長と先頭を歩く。会員一同、積雪を踏んで隊列にしたがう。参加は、石川、野田、河島（以上福岡）、広兼一家4人（益田）、松田（丹後）、横川、原田（兵庫）、本郷ほか1人（佐原）、渡辺一郎、貞子（東京）など各地からの10数人でした。

○2000・2・25 「図説・伊能図を読む（渡辺一郎著）」発行。

○渡辺代表は、四国には出られなかったので、やりくりをして、車を運転して一番遠い足摺岬へ出ました。主催者代表としては遠路の訪問なので、土佐清水市長さんは大変喜ばれて、到着式で日本酒「ジョーン万次郎」1樽を下さった。

東京へ市長さんはどうやって出られますかという問いに、「ここは日本が一番遠いところですよ。高知空港まで3・5時間かかります」といわれたのが印象に残った。到着式では忠敬と同じような先覚者・ジョン万次郎はこの産です、と御挨拶をいただいた。

○帰りは、菅哲彦さんの案内で伊予小松藩の史跡を見学。資料室で、かつて伊藤栄子さんが解説し、ロッカーにぎつり詰まった小松藩会所日記の手書き解読本の山を見て驚嘆した。伊藤さんは古文書をよく読める人ですが、こんな大仕事の実績があると知ってあらためてビックリしました。

○四国への義理を果たしたつもりで帰路について、伊能事務局から、予定している今治の講演会のあと「しまなみ海道ウオーク」尾道側の隊長を務めるよう要請を受ける。

○伊能洋・陽子さん松山大会へ。あと、菅さんを表敬訪問。会員の菅さんは、小松藩もと家老の御子孫。忠敬隊もお世話になった。

○渡辺代表「今治・しまなみ街道ウオーク」へ。今治国際ホテルに入り、夜、児童育成クラブ主催の講演会。あと懇親会で教育長以下と忠敬を語る。

翌日、出発式で今治隊約700名の前で主催者挨拶。港まで同行す

る市長以下を見送り後、小学校児童300人にお話。ついで、尾道隊の到着場所に車で移り、以後、今治城の到着まで、主催者代表兼尾道隊長をつとめる。途中、地元有線放送に対応し、今治大橋橋上でフジテレビ（全国版）の取材に応じました。

○あと、竹原出発まで時間を貰ったので、忽那諸島の教育委員会が伊能図と信じている地図の調査に向かう。

この地図は現在の地図と対比して正確で、針穴があり、測線の描き方など伊能図によく似ていました。とても当時の村人で作れる図ではありません。おそらく伊能隊の下図または資料を貸与されて写したものです。

珍しいので同行していた朝日新聞記者に大阪本社に送稿するようにアドバイスする。翌日の大阪本社版の第2社会面にカラーで紹介されました。

○フェリーで竹原に戻って、（乗客は数人）本部隊にビールを差し入れて一緒に夕食。翌朝から広島まで手分け隊の隊長をつとめました。

○5月連休には武蔵野の東京国際スリーデー・マーチで、第1回全日本歩測大会を開催しました。伊能ウオークの影響を今後にも継続させるために企画したものです。武蔵野市、日本ウオークキング協会、国土地理院、測量の日実行委員会、日本土地家屋調査士会連合会、朝日新聞社、劇団俳優座と伊能忠敬研究会の協力で開催。3日の歩測達人戦、4日の名人戦に約800人が参加しました。

○福岡講演会。石川支部長が早くから土地家屋さんと計画していた

講演会に渡辺代表と伊能陽子さんが出かけました。

○渡辺代表、佐賀で講演。伊能ウオークを佐賀のお隣の千代田町で出迎えました。測量設計業協会は揃いの帽子とジャンパーで大軍勢でした。町長はじめ関係者に挨拶して御礼を述べ、あと講演会場へ向かいました。また、佐賀県立美術館では会員有志が手造りで伊能忠敬展開催していました。夜、西日本新聞の川上支局長と食事。伊能忠敬を最初に顕彰した佐野常氏は佐賀県人だったという、勘定を持ってくれて、しかも記事にしてくれました。

○福江島には伊能陽子さん等会員が大挙出かけました。地元の会員・的野氏らの尽力で、伊能ウオーク隊は、この地で病没した副隊長・坂部貞兵衛の墓前祭をおこないました。伊能さんから、坂部が忠敬にあてた書簡10通を地元で贈呈。坂部副隊長が眠るこの地に永久保管されることになりました。会員は平戸を経て長崎へ向かいました。

○島原には伊能隊から地図を献呈した記録があるのだが、地図が見つかっていません。この機会に調査をということで、渡辺代表は古賀方子会員の協力により、黒井副知事から島原市長に御紹介をいただきました。

新聞、放送教社立会いの鳴り物入りで、入江、松尾会員らと、藩主松平家菩提寺の島原市の本光寺所蔵の地図を精査しました。伊能図をもとにした村絵図数枚を発見しましたが、伊能図は見つからず、空振りにおわりました。

○伊能ウオーク実行委員長の江橋さんの熱意で、伊能ウオークは屋

久島に渡りました。屋久島は伊能測量最南端なので、これを機会に記念碑が建ちました。ほかでも、北海道の虻田町で記念碑を立てていただきましたし、北九州では記念碑兼測量基準点を設置する話が進んでいます。屋久島には永野さん、伊能陽子さんらが出席しました。

○伊能陽子グループ、沖縄へ大挙16人で出かけました。かねてから積み立てをしていたとのことでした。

○九州伊能忠敬展10・6開幕。古賀方子さんが企画から資金集めまで担当。彼女の熱意で実現したものです。初公開の史料もあり、いい展示でしたが、入場数は残念ながら5064人でした。

○11月1日NHK総合テレビ21・15分「そのとき歴史が動いた」で伊能忠敬が放映されました。渡辺代表が企画段階より協力したもので、解説などに出演。視聴率11・4%。いい成績でした。

○並行して、渡辺代表は、NHK総合テレビのお正月時代劇「四千万歩の男―伊能忠敬―」の監修のため、7月から台本のチェック、測量、天測、地図製作などの場面設定、撮影立会いのため、約3ヶ月間に正味20日も付き合いました。このテレビの視聴率は10・2%でした。激戦区のこの時間帯としてはいい成績でした。

○渡辺代表、広島土地家屋さんの研修会に講師出席のあと、広兼会員（土地家屋調査士会益田支部役員）応援のため、山陰の三隅、浜田へ出ました。浜田大会の参加は100人もいなかったが、1000人の積りで大きな声で主催者挨拶をする。あと、伊能図展の説明。こち

らは140人くらい来場、熱心な方が多かった。

○鳥取の上田会員、ご先祖が忠敬隊を宿泊させたそうで、ここは一番と、手持ち資料を使ってミニ伊能展を開きました。また、漫画家と組んで朝日新聞の県版に忠敬の漫画を連載。智頭の田中会員は小さな小学校の教頭先生だが、朝日新聞から献呈の御用旗を立て、小学生を連れて測量ルートの調査をおこなう。発表は県大会で入賞しました。

○東海道の静岡では、ウオーキング協会主催の講演会。加藤剛を囲む夕べ。静岡大会（1000人集まる）と、盛沢山の行事でした。渡辺代表は全行事に出席。伊能陽子グループ15人は大会を歩きました。小田原大会にも伊能軍団は10数名出かけました。

○朝日新聞でも紹介されましたが「新ちゃん」トラックこと新沢会員の働きは現場でよく実見しました。毎日早朝から大変でした。よくやってくれたと思います。出発1ヶ月前になつてから、事務局の遠藤さんがトラックが要るといいだし、研究会から新沢君と大庭さんが出て実現したものです。「新ちゃん」トラックは、はじめレンタカーでスタート。名物になった色彩豊かな車は遠藤さんが、大学時代の先輩に無理をいって、第2ステージから実現したものです。

研究会の伊能ウオークへの貢献では、車を持込みで随伴車をやってくれた大庭会員と「新ちゃん」の働きが一番大きかったと思います。

伊能ブームのきっかけとなった

伊能忠敬研究会5年間の歩み

渡辺 一郎

伊能ウォークの終了を迎えて、伊能忠敬再発見の活動がよくもここまで来たものだとの思いを深くしますが、これまでの活動の跡をたどって御参考に供します。

95.3.27—28 フランスに伊能図があるのを知り（日経記事）渡辺夫妻が調査のため渡仏、パリ郊外のイブ・ペイレ氏を訪問。最高級の伊能中国8枚の完全揃いを確認し、日本展示を打診する。

95.4.6 朝日新聞夕刊「ひと」欄で渡辺の渡仏調査が紹介される。パリ支局長・清水弟さん（当時）発の第1報であった。

95.5.上旬 朝日新聞を見た伊能陽子さんから渡辺に電話がかかる。（世田谷伊能家との付き合いのはじまり）

95.10.17—19 佐原市中央公民館でフランスの伊能中国里帰り展を開催。佐原市教育次長・香取禧良さん（当時）の尽力であった。

朝日、日経、NHKの報道があつて、3日間に各地から3300人が佐原へ集まる。古地図専門家を集め検討会を開催。

95.11—96.3 忠敬人氣に感心して、伊能忠敬研究会結成を呼

びかける。全国から、歴史家、社会科教師、大学教員、主婦、測量技術者、忠敬ファン、土地家屋調査士など多彩な顔ぶれが入会。会報第1号を3月1日に発行する。

96.5.22 フランスの伊能図を江戸博あたりに持ってきたらと「朝日新聞日曜版」編集長に戻っていた清水弟さんと朝日OBの雪山さん（元ボン支局長）にいわれる。

96.6.23 第1回例会を開く。会員74名中47名参加。富岡八幡宮から間宮林蔵墓まで歩測大会をおこなう。浅井京子さん（富岡美術館学芸課長）歩測名人第1号に入賞。あと清澄庭園で懇親会。

96.8.15 江戸東京博物館に「伊能忠敬展」を提案する。役員の学習院女子部教頭・斉藤仁さん（当時）と同道した。（忠敬は深川黒江町から、日本測量を始めたのだからというのが提案理由）

96.11.10 佐原で第2回例会。鈴木市長挨拶、小島一仁、渡辺一郎両名が講演。世田谷伊能家の史料など展示。

96.11.20 江戸東京博物館の担当から伊能忠敬展内定の連絡をうける。朝日新聞と組みたいとの意向を聞く。

96.12.4 国土地理院長の野々村さん（当時）に相談する。野々村氏も「朝日」に持ち込むことに賛成。話をしてくれることになる。

96.12.20 朝日新聞・清水建宇さん（当時）、出版局企画担当。現

在、テレビ朝日ニュース・ステーション担当、佐藤嘉尚氏と研究会に来訪。日歩協・木谷さん等と伊能ウオークを考えている。朝日新聞120周年記念事業として提案したいとお話。もちろん賛成。

96.12.21 NTVで「人生50才の旅たち・伊能忠敬」放映される。(千葉県提供の45分番組。忠敬役は渡辺一郎。解説・案内は江守徹。企画段階から協力した)

97上期 佐原市の伊能忠敬記念館と非公式打ち合わせ、あるいは英国海軍水路部に伊能小図借用申し入れなど、「伊能忠敬展」の事前交渉をおこなう。フランスのペイレさんにも了解をとる。展示品のリスト案も作る。江戸博の「伊能忠敬展」決定をうけて、俳優座の古賀さん「俺も前から演劇と映画を考えていた」と仲間に入る。

97.9.29 「渡辺一郎著・伊能測量隊まかりとおる」出版。

97.10.13 日歩協・木谷専務の発案で、江戸博「伊能忠敬展」、伊能ウオーク、俳優座の企画など、グループ内の氣勢を揚げるため、「伊能測量隊まかりとおる」の出版パーティを日比谷のプレスセンタで開く。関係者約150人集まる。伊能研約40名出席。

97.10.26 「気象庁で最終版伊能大図写本43枚発見、国会図書館に移管」と全国紙各紙一斉に報道。(発見者は研究会員で国会図書館特別資料課長(当時)の鈴木純子さん。渡辺は伊能忠敬記念館青木学芸員と調査を委嘱され、事前チェック済み)会員でもある朝日・堀田記者の御尽力をいただいた。のちに本図は、国会図書館と江戸東京

博物館で同時公開し「伊能忠敬展」を盛り上げた。

98年初 江戸博の忠敬展、伊能ウオーク、俳優座舞台劇「伊能忠敬物語」は共同プロジェクトに決定、定期的に連絡会が開かれるようになる。

98.4.10

①伊能ウオークの計画が朝日新聞紙上で発表される。

②高輪プリンスホテルで3プロジェクトのオープニングパーティが開催された。伊能忠敬研究会会員約90名出席。九州、関西など遠路をいとわない者が多く、関係者は熱意にあきれる。

③同日付で読売新聞「江東版」は、江戸博「伊能忠敬展」併催の歩測大会(主催・日歩協、伊能研)を大きく報道。

98.4.16 江戸博の「伊能忠敬展」開幕直前であるが、北海道の研究会員・高木さんの連絡により、渡辺が急遽東京都立中央図書館を調査する。日本には無いとされていた伊能小図本州東部を発見、日本経済新聞がとりあげる。

98.5.15 都立中央図書館の伊能小図について、東京都教育庁が記者発表。各紙追従、大ニュースとなる。本図もあとで江戸博の「伊能忠敬展」に展示された。

98.4.21-6.21

①江戸博「伊能忠敬展」開催。過去5年間で2番目の入場者があった。(入場者数一一一、三九九名を達成)

②期間中に併催事業として、忠敬隠宅から浅草吾妻橋を結ぶ約10キロのウォーキング大会を4回開催（日歩協との共催）。コース上に3箇所の歩測区間を設けた。調査票提出者509名、歩測名人6名、歩測達人18名が誕生。日歩協・木谷専務は歩測達人に入賞。歩測区間の測定は国土地理院にお願いした。

③井上ひさし氏の講演会も開催。江戸博の講堂は満席。多数の方が床に座って聴講した。

④「伊能忠敬展」図録を研究会で作成した。学芸員にとつて死ぬほどつらいという図録を引き受け、会員で分担執筆。制作はアワプランニング。閉幕後市販。目下、伊能忠敬を調べる人にとつて必須の参考書となっている。

⑤国土地理院を中心とする測量グループの御尽力で「ミュージック・ショウ・伊能測量と近代測量」を上演。忠敬役は渡辺。近代測量の解説は野々村院長。伊能測量と近代測量を舞台の上で演じ好評だった。

98.6.16 NHK歴史番組「堂々日本史」で伊能忠敬を放映。渡辺は伊能測量の指導に出演。

98.8—98.12 伊能ウォークのルート選定資料として、国土地理院から「伊能忠敬測量ルート調査（その1）」を受託。研究会員のプロジェクトチームで制作。伊能ウォークのルート原案を記入して日歩協に提供した。

98.9.10—12 伊能ウォーク・ブレウォーク（忠敬青春の道ウォーク）開催。会員で忠敬の父・貞恒の実家の当主・神保誠さん、九十九里から佐原まで名誉隊長として先頭を歩く。

98.10.31—11.3 東松山の国際スリデー・マーチ会場で、伊能ウォーク本部隊員選考委員会。渡辺は選考委員長を務める。伊能、神保、その他の会員が選考大会に参加。

98.11—98.12

伊能教室用資料の準備。伊能大図複製の制作に協力。

98.12 随伴車運転要員として伊能陽子さんから大庭さんを紹介。また学芸員兼資料輸送担当として新沢会員の参加が決まる。大庭さんは車両持ち込みである。

99.1.25 伊能ウォーク進発。

各地の会員は、地図説明員、ウォーク参加、イベントの設定に、微力ながらよく健闘した。遠隔地の会員には、ただ一人で孤軍奮闘してくれた方が多かった。

渡辺は、主催者代表の一員として、また総隊長として講演、ウォーク参加のため2年間にちようど40回出かけた。伊能陽子さんは研究会の役員でもあるが、伊能家の広報担当のような役割もあつて、20回も出かけていただいた。

会員でウォーク参加回数が多かったのは、土肥さん52回、川上さんは65回、福田さん25回でした。忙しい方たちなので、心から敬意を表します。

本部隊メンバーの中山さんは、時々参加する勝手がわからない研究会員をよくサポートしてくれました。ありがとうございました。

伊能忠敬子ども調査隊

—伊能忠敬の測量した道(智頭街道(上方往来)の宿場町の調査—

田中 精夫

▼調査のきっかけ

学校のある山郷地区は、江戸時代には、因幡地方と畿内、江戸を結ぶ参勤交代の道路(智頭街道)沿いに開けた集落で、駒帰や中原などの宿場町がありました。国土地理院で開催された「全国児童生徒地図優秀作品展」でたまたま「伊能忠敬記念館」の存在を知り、同館を訪れました。同館の紺野学芸員の「ご教示を得て、初めて私たちの校区も伊能隊が測量していることを知り感激しました。早速学校で話し合ったところ郷土学習の一環で伊能隊のことを調べてみようということになりました。五・六年生十一名全員が参加することになり、朝日新聞社および研究会員・上田勝俊氏のご協力を得て、五月から調査に取りかかりました。

▼調査内容

子ども達は、伊能忠敬はどんな人物なのか、智頭街道のどの町に宿泊したのか、どのように測量していったのか、その宿場町は今どうなったのかに疑問を持ち調査を始めました。『伊能忠敬測量日記』に書かれた智頭街道の宿場町は、鳥取市・元鑄物師町、河原宿、用瀬宿、智頭宿、駒帰宿、野原宿で一つ一つ、地元の郷土史家に聞いたり、現地で屋号を調査したりして調べました。

また、伊能隊の鳥取県の測量は、第五次調査が文化三年(1806.9.18~9.30)、第八次調査が文化十年(1813.12.30~1814.1.22)であることもわかりました。文化三年の時は、海沿いのコースで忠敬は病氣療養中であつたこと、米子で役人が城下の測量を断るなどの出来事がありました。文化十年の時は山沿いのコースで

東郷湖の測量、大山寺、三徳山、宇部神社、八上姫の神社の参拝、面会者に親切に対応したこと、星測の記事が多く記録されていることがわかりました。このあと、子ども達に、測量の困難さを体験してもらうために、歩測の訓練をして校区のルートの一部を測量しました。

▼子ども感想

- ・伊能忠敬の測量は分かれて測量を行うなど計画的に丁寧に測量している。無駄がなく効率良く測量していると思う。
- ・各宿場町の町並みは、江戸時代の面影を残しているところが多い。用瀬宿は細い間口の家並みが続き、智頭では格子戸の家が続く古い感じがする。用瀬、智頭、駒帰には本陣(茶屋)跡があつた。
- ・智頭宿は参勤交代で大名が泊まるほど、宿場町として有名だったことが分かりうれしくなつた。
- ・智頭宿には、伊能さんが測量の時に起点にした道標もあつた。
- ・駒帰宿では、大坂屋という宿に泊まつていた。宿主は幸三郎という人で寺子屋の先生もしていた。昔の教科書も見せてもらった。
- ・野原宿は今は静かなところだけれど調べてみると、昔はたくさん宿があり、とてもにぎやかだったことが分かった。
- ・野原宿の小川で江戸時代の茶碗のかけらを発見した。あの茶碗をどんな人が使っていたのだろうかと思つた。
- ・野原宿には、伊能さんが泊まつたことを誇りに思つて「忠敬」という名前をつけた人がいると聞いて、伊能さんはすごく尊敬されていたんだなと思つた。

▼終わりに

十一月に伊能陽子さんのお話をお聞きする機会も得ました。伊能さんから家の物置から大事な資料が見つかったエピソードなどを聞きました。ごみだと思つていたものが大事な資料だったこと、伊能さんは迷信を信じなかつたことなどのお話を聞き、本物の地図にも触れて、さらに関心を高めることができました。調査

の後で、手分けをして宿場町の地図を作り、学習したことをまとめて鳥取県児童生徒地域研究会で発表し教育長賞を受賞しました。地図は、国土地理院「全国児童生徒地図優秀作品展」にも出品していただきました。

伊能忠敬の学習を通じて、数々の経験ができて伊能を敬愛する人々との出会いがありました。忠敬は、日本の偉人を身近に感じることができ、先人のすばらしい生き方を実感できる格好の教材でした。今、子ども達は更に伊能忠敬のことを調べてみたいと意欲を増しています。

宿泊地	宿泊日	亭主	わかったこと
鳥取市	1844.15	賀露屋久兵衛	・鍋屋・櫛屋などの屋号
鋳物師町	～16	米屋佐兵衛	・水運の発達した交通の要所
河原宿	1844.17	太兵衛	・賀露屋など鳥取と共通の屋号
(宿泊所)		源七	・千代川に隣接、水上交通便利
川瀬宿	1844.18	只吉	・油屋、米屋など商家の屋号
(宿泊所)		長四郎	・枳形、寺など城下町の名残
智頭宿	1844.19	篠屋仁右衛門	・篠屋、塩屋など多数の屋号
(宿泊所)	～120	土屋作兵衛	・上町坂など3つの大きな通り
駒形宿	1844.20	文五郎	・茶屋、大坂屋などの屋号
(宿泊所)		幸三郎	・上方往来因幡側最後の宿場町
野原宿	1844.21	長治郎 徳右衛門 尚右衛門	・鍛冶屋など峠の宿場の屋号
(宿泊所)			・忠敬に因んだ「古谷忠敬氏」

(鳥取県八頭郡智頭町立山郷小学校)



山郷小学校の生徒が、調査の結果をまとめた「現代図と伊能図の比較図」である。伊能測量の順路に沿って、かなり広い範囲にわたって調べられている。

伊能古文書教室・佐原伊能家史料を読む

『佐原邑河岸一件』(三)

小島一仁

欠込願

三郎右衛門(忠敬)と茂左衛門が問屋として公認され、二人で、永一貫五百文の川岸役運上金を、毎年、上納するようにと申し渡されたのは、明和九年二月のことであった。ところが五月になって、また、勘定奉行所から「すみやかに出頭せよ」という差紙が来た。しかし、三郎右衛門は別に驚きはしなかった。差紙より前に、江戸の公事宿忍屋三右衛門から、佐原村の権三郎という者が奉行所に欠込願をしたということが知らされており、今度の呼び出しは、おそらく、その件についてであろうと推測できたからである。

欠込願(欠込訴)というのは、村役人などの手を経ないで、直接奉行所や評定所にかけてこんで訴えることである。通常は禁止されていたが、幕府の政治的安危や経済的得失などに関する緊急の訴えであれば、認められることもあった。権三郎の願は「三郎右衛門・茂左衛門のほかに、自分も川岸問屋として認めてもらいたい、そうすれば、毎年、金十両の運上金を差し出す」というものであった。金十両というのは三郎右衛門・茂左衛門の二人で永一貫五百文というのにくらべると、おどろくほどの多額である。そのために、この願は一応とり上げられたのである。

さて、今回の差紙では、三郎右衛門と茂左衛門のうち、どちらか一

人に村役人がつきそって出頭せよとのことなので、関係者が集って相談した結果、出府するのは、茂左衛門と組頭藤左衛門・同平兵衛の三人ときまった。三人は六月二日に佐原を出立、江戸飯田町(東京都千代田区)の上州屋利右衛門方に落ち着き、奉行所へ着屈をした。しかし、その後一か月ちかかったつても奉行所から呼び出しがなかったため、茂左衛門は親が病気であることを申し立てて佐原へ帰ることになり、かわりに、三郎右衛門と茂左衛門家の召使いである半蔵が江戸へ登った。半蔵が茂左衛門の名代として奉行所へ届出を行い、上州屋に泊った。三郎右衛門は深川伊勢崎町(東京都江東区)に出店を持っていたのでそこに泊った。そして、奉行所から半蔵に呼び出しがかかったときは、すぐにそれを三郎右衛門に知らせ、三郎右衛門も奉行所に出頭する手はずになっていた。ところが、七月一日、奉行所から通知があったとき、半蔵からの連絡に手落ちがあったため、翌日、三郎右衛門が奉行所へかけつけた時は、すでに半蔵らは白砂へ出て吟味が進められており、しかも、公事宿の上州屋から様子を聞くと、半蔵が不屈きな供述をしてしまったらしい。

そこで、三郎右衛門は、「三郎右衛門病気の所全快に付、只今着」と届け出て、白砂へ出ることを許してもらった。以下、少し長文であるが、吟味の様子を原文で読んでみよう。

吟味時、茂左衛門・三郎右衛門・組頭藤左衛門・同平兵衛の四人、
 佐原村に在りて、奉行所へ出頭せしむ。奉行所より、上州屋利右衛門方へ
 出立し、江戸飯田町に落ち着き、奉行所へ着屈した。しかし、その後一か月ちか
 かったつても奉行所から呼び出しがなかったため、茂左衛門は親が病気であるこ
 とを申し立てて佐原へ帰ることになり、かわりに、三郎右衛門と茂左衛門家の召
 使いである半蔵が江戸へ登った。半蔵が茂左衛門の名代として奉行所へ届出
 を行い、上州屋に泊った。三郎右衛門は深川伊勢崎町に出店を持っていたので
 そこに泊った。そして、奉行所から半蔵に呼び出しがかかったときは、すぐにそ
 れを三郎右衛門に知らせ、三郎右衛門も奉行所に出頭する手はずになっていた。
 ところが、七月一日、奉行所から通知があったとき、半蔵からの連絡に手落ち
 があったため、翌日、三郎右衛門が奉行所へかけつけた時は、すでに半蔵らは
 白砂へ出て吟味が進められており、しかも、公事宿の上州屋から様子を聞くと、
 半蔵が不屈きな供述をしてしまったらしい。

右によると、最初に、吟味役佐藤友五郎から、「権三郎が川岸問屋をしても差しつかえないか」という尋問があった。これに対して忠敬は「大いに差しつかえがあります。権三郎も問屋をすることになれば、私共の商売はうすくなって困ります」と答えた。ところが、どうしたわけか、茂左衛門の名代として出頭していた半蔵は「さしつかえありません」と申しのべてしまったらしい。その点を追求されると、忠敬は、「半蔵は若年者のため不埒なお答をしたようですが、私が只今到着しましたので、これからは万事私におたずね下さい」と願った。それで、「不埒な名代」を差し出したことについては叱られたが幸いに、半蔵がのべたことなどは、すべて取り消されることになった。

川岸役永十貫文

願いがうけ入れられたことに力を得て、忠敬は、吟味役からの尋問を待たずに、積極的に、権三郎がいかに問屋として不適当な人物であるかをのべたてた。

「権三郎は私方に二〇年も船頭奉公をしていた者で、私の土地で暮していましたが、地代を三年も滞納しております」

「権三郎は、三年前、御代官遠藤兵右衛門様へ新規川岸問屋の願いをして村方一同の反対にあい、その後、また小野日向守様に欠込願をして不届きのため過料を仰せつけられました」

「権三郎の問屋願は、私共兩人だけでなく村方一同も不承知です」

簡単にまとめれば右のようなことであるが、原文でこのくだりを読むと、忠敬の権三郎に対する敵意と闘志のすさまじさが伝わってくる。しかし、吟味役は、「村方の意見は其の方に聞いてはおらぬ」といって忠敬の申し立てをおさえ、予定していたらしい尋問に移った。次に、

以後しばらくの間の、吟味役と忠敬のやりとりを要約して記してみよう。

吟味役Ⅱ権三郎が申すには、国元で茂左衛門に自分も問屋をしたいと相談したところ、差しさわりのないということであつたというが、この点についてはどうか。

忠敬Ⅱ茂左衛門が権三郎と対談したことなどありません。茂左衛門と私は同役なので日常何かと相談しておりますが、権三郎から申し入れがあつたことは全く聞いておりません。

吟味役Ⅱでは、権三郎は永十貫文差し上げて運送したいというのだが、お前たち一人で金十両づつ、二人で金二十両も出して運送するか。

忠敬Ⅱ権三郎は無高の者で資産もなく、そのような大金の願いをするとは納得できません。権三郎がもし問屋をすることになれば自分のもうけばかりを考えるか、あるいは、余分の荷もない場所なので商売が引きあわず立ち退くか、いずれにしても村方一同の難儀になります。私共兩人の方は上納金は少額ですが、兩人共相応の田畑も所持しておりますので、毎年、まちがいなく納めます。どうか当春きめられた通り、兩人に仰せつけ下さい。

吟味役Ⅱ権三郎が立ち退くであろうとは、推量の申し分で不届きである。

忠敬Ⅱそれは、権三郎が無高の者で、どれほどのことができるかわからぬことを申上げたまです。

吟味役Ⅱ増金もせず、また権三郎に渡しもせぬというのは、公儀を軽しめる申し分で、不届き千万、そんなことをいうなら、権三郎に渡すがよい。

忠敬Ⅱ権三郎願いの儀は、私共兩人のほか、村役人村方一同不承知

でございます。

吟味役Ⅱ村役人村方のことは、其の方にたずねてはおらぬ。ただ、増し金を承知して引きうけるか、それとも権三郎に渡すか、どちらにするか返答せよ。

忠敬は、何としても増し金には応じないつもりでいたのだが、「どちらにするか返答せよ」と追いつめられて、やはり困った。そこで、「同役茂左衛門が病気で国元に帰っておりますので、茂左衛門と相談したいと存じます」といつて吟味の日延べを願った。そして一たん退出し、急いで二十五日（七月）までの日延願を書いて提出したところ、昼後になって、権三郎といっしょに白砂へ呼び出された。

今度は権三郎のくらしに関する尋問が行われた。

まず、吟味役から、「権三郎は無高と申したが相相違ないか」と問われて、忠敬は、「権三郎は私方に二十年も奉公して、その後一人立ちになった者ですが、田畑を買い入れたようなことは聞いておりません」と答えた。ところが、これに対して、権三郎が「私は上宿組の者で五石二斗余りの高を持っております」と申し立てたため、忠敬は、吟味役から「不埒なことを申し上げた」として、大いに叱責された。しかし、忠敬は、それで恐れ入ってしまったわけではなく

「私の住む所は本宿組、権三郎は上宿組です。佐原は三千五百石余の場所です（本宿組・浜宿組・仁井宿組・下宿組・上宿組）に分れておりますが、一組隔てれば一ヶ村の隔たりと同様ですから権三郎の高については、しかとは存じませんが、脇合の物語では無高と聞いております。上宿組に問い合せをしなかったことについては一言の申し分ありませんが、権三郎はもととも田畑を持たぬもので、私から借地をしていたのですから、上宿組に高があるといつても実は兄の分

であるかも知れません。帰村の上、上宿へ聞き合せた上で申し上げます」弁明した。

吟味役は、「そんな事では埒が明かぬではないか」と叱つたが、それ以上追求せず、次に、権三郎の地代滞納についての取り調べに移った。権三郎は、長い間地代を滞納していたこと、三郎右衛門から何回も支払いの督促をうけながら、居留守などをつかつて支払いに応じなかったことなどを認めた。

この日、七月二日、夜に入ってから、忠敬は帰村を仰せつけられた。

一件落着

忠敬は、一たん、佐原へ帰ったが、孟蘭盆を過ぎて再び出府の準備にかかり、七月三日、村方の惣代らと連れだつて江戸へ向つた。

江戸へ着くとすぐに奉行所へ着届けをし、七月晦日になって、問屋願人三郎右衛門・村役人惣代惣右衛門・百姓船人惣代半右衛門・同五兵衛の連名で、願書を提出した。この願書は全体ではかなり長文であるが、三郎右衛門の申し立ての部分と村方惣代の申し立ての部分の二つに分れているので、次に、三郎右衛門の申し立ての部分だけを、原文で掲げてみよう

三郎右衛門の願文

一 遠方若くは所外より我が国常陸郡水戸村
を去る所より由人氏石を去る所より由人氏
常陸河原陽所より由人氏石を去る所より由人氏
陽所より由人氏石を去る所より由人氏石を去る
由人氏石を去る所より由人氏石を去る所より由人氏石を去る

先達而御召二付私共罷登候而御吟味奉請
候へとも右権三郎義は私方二親の代より年久敷
船人奉公仕、當時も私借地二罷在候所、地代之
儀も年々相滞候程之者二御座候、依之何分
権三郎願相止、先規之通被為仰付被下置候様
此度村役人村方惣代罷出御願申上候間
何卒私共二限り運送仕候様御勘弁被成下
此上之御慈悲奉願上候

乍恐書附以奉願上候

一遠藤兵右衛門御預り所下総国香取郡佐原村

三郎右衛門茂左衛門兩人代右三郎右衛門申上候、

当春河岸場御吟味二付、村一同かし

場運送私共江被仰付被下置候様奉願

上候処、証拠無之候而は相済不申候旨被仰聞

候二付、貞享元禄より之運送請取書附并

帳面等奉差上候所証拠相分り、先規之通

河岸場運送兩人江被為仰付、村方一同二

難有奉御請候、然所今度同村権三郎私共

同様佐原川岸運送仕度之旨奉願上候二付

この願書は、河岸一件のそもそのはじまりから書きおこしているが、要は、「権三郎の願いを認めず、先規の通り（今年二月にきめられたとおり）私共に限って運送できるようにおねがいします」というもので、増金のことにはふれていないように見えるが、実は、「先規之通り」というところに、増金を拒否する態度が示されているのである。

間もなく呼び出しがあったが、吟味役佐藤友五郎は、やはり、「三郎右衛門と茂左衛門で永十貫文出すかどうか」から吟味をはじめた。これに対して、忠敬は、まず、「権三郎が大金で願い上げたことは、どうしても納得できません。権三郎の願いは、お取り上げなさるぬように」と答えたが、吟味役は、なおも「権三郎の願いはともかくとして、川

岸役十貫文は兩人で引き請けるか」と迫ってくるので、半右衛門と五兵衛も三郎右衛門と一緒に、「先規之通りの永」にしていた。三郎右衛門も村方も不承知であっても、公儀から権三郎に仰せつけられたら背くことはできぬぞ。よって、永十貫文差し上げて引き請けよ。でなければ権三郎に渡せ」という。忠敬は、それから、何度も「先規の永銭」を願ったが聞き入れられないので、ついに、二人で「永二

百五十文」に増金することにしたが、吟味役から「そんなことでは相すまぬ」とはねつけられた。それでも、忠敬は「それ以上はできません」と食い下がった。

ところが、その時、近くにいた別の吟味役小笠原三九郎が、佐藤友五郎の方を向いて、「それなら、その者どもから川岸運送を取り放しにするのがよろしかろう」と、脇からさしずしているのがわかった。やむをえず、忠敬は、「兩人で永五百文で引き請けます。もう、これ以上はどうしようもありません」と申し上げた。そのとき、佐藤友五郎は「そのくらいでは済むまいが——」といって、この件を打ち切った。その後、佐原川岸の荷物の数や口銭、酒・醤油の運送等についての取り調べがあり、また、権三郎との対決もあった。

権三郎は「私は常陸・下総の御城米の御用船をつとめ、佐原村の御城米の積出しには村方から頼まれております」と申し立てたが、忠敬は「佐原村は船数七十艘で往來するので、舟切（舟不足）ということはなく、御城米の積出しに困ることなどありません。権三郎が名主から頼まれて役船をつとめたというのはまちがいで、自分の方から願って荷積をしていただけです」と反論した。権三郎は、なおも、声高に役船をつとめたことをのべ立てたが、取り上げられなかった。

この夜、八時ごろ、関係者一同が呼び出され、口書に印形をする段になった。口書というのは、訴訟当事者双方——この場合三郎右衛門方と権三郎方——の供述を役人が記録したもので、これに印を押せば裁判は、事実上、終りになるのである。勘定奉行石谷備後守以下、吟味組頭・吟味役の面々が居並ぶ前で口書きを読み聞かされたとき、権三郎は押印の日延べを願った。しかし、日延べは認められず、かえって、石谷備後守から「重恩ある主人に対してこのような願をした不届き者」と叱りつけられてしまった。口書は「……佐原村運送仕り度く左候はゞ、

兩人の外、永拾貫文差上申すべく願ひ上げ奉り候儀、全く以て心得違に御座候、段々御吟味請け奉り候所一言之申分これ無く候」というものであったが、権三郎はこれに印を押さざるを得なくなったのである。

一方、三郎右衛門方の口書は、さきにきまった二月中の口書につづけられて「……御吟味御座候所権三郎願相立たず、先規の通り兩人へ仰せ付けられ、御吟味の上兩人にて永五百文相増し都合永貳貫文上納仕り候様に此度仰せ付けられ承知仕り候」というものであった。そして、この口書には「永五百文相増し」となっているが、判決ではそれも取り消された。それは、権三郎の欠込願が「心得違」として退けられたため、二月に取りきめられた「壹人に付永七百五拾文宛都合壹貫五百文」がそのまま生き返ったものと思われる。忠敬は「川岸役永過分の増もこれ無く候に付一同大悦致し候」と記している。

なお、忠敬は、この記録の最後に「明和九年辰二月同七月兩度河岸一件、安永三年午極月相究」と書いている。その意味は、河岸の問題自体は明和九年のことであったが、勘定奉行所に請書を出したのは、翌々年の安永三年十二月二十八日のことであり、それによって、河岸の件は最終的に落着いたということである。

忠敬がこの『佐原邑河岸一件』をまとめたことは、伊能景利の業績の影響の下で、記録の重要性を知ようになった結果と考えられる。後に、師高橋至時の『ラランデ曆書管見』を筆写したり、『測量日記』を書いたりした忠敬のすぐれた記録能力は、このころからつちかわれていたであろう。

○岩波書店から、大谷亮吉『伊能忠敬』が復刊されます。発行は限定350部、定価三二〇〇円です。研究会経由の場合、約一五%引です。関心のある方はお問い合わせください。

伊能忠敬の房総沿岸測量 (三)

渡辺 孝雄

第三日 那古から洲崎まで (館山市)

七月二日 この日は曇っており、六時半前(午前七時前)に那古村を出発している。正木村(二六五軒)(安房国安房郡に入る) 湊村(四九軒) 八幡村(五六軒、鶴谷八幡宮領一五七石) 北条村(水野氏一万五千石の陣屋あり、二〇八軒、新宿町五〇軒) 長須賀村(一三三軒・六一一人) 真倉村(館山上町三四軒・館山中町四八軒・館山下町六三軒、浜上須賀三一軒 岡上須賀六二軒 楠見浦五一軒 新井浦一四〇軒 上真倉六二軒 下真倉六二軒、館山に稲葉氏一万石陣屋あり) 柏崎浦(沼村の内、一一六軒) 沼村(一二二軒) 宮城村(七三軒) 笠名村(七三軒・四二〇人) 大賀村(三八軒・二二四人) 塩見村(四九軒・三〇一人) 香村(七四軒・四四三人) 濱田村(二四軒・一四二人) 見物村(三八軒・二二三人) 波左間村(七八軒・五八五人) 坂田村(五九軒・四一三人)を経て、洲崎村(五三軒・四四三人)には八つ(午後二時)頃に着いている。宿は洲崎村名主の仁右衛門家であった。この日の那古村から洲崎村迄の測量距離は、三里三一町三二間(一五・一三七・二四)であった。忠敬は安房国の村々については、かなり細かい記述をしている。例えば真倉村の内のそれぞれの町ごとの村高と人数を記録し、また柏崎浦通りの長さとして七町二二間までも書込んでいる。柏崎浦から洲崎村までの

村々は、十一ヶ村で組合を構成し、各種御用を勤めていた。これらの村役人が挨拶にでている。また川名村・伊戸村の村役人も挨拶に出ている。夜間の天体観測で、三四度五八分三〇秒であった。

忠敬一行が泊まった洲崎村の名主渡辺仁右衛門家は、源頼朝が伊豆から安房に逃れて来た時に、頼朝から綿鍋姓をもらったとの伝承のある家である。その家は地元では「オオヤ」と呼ばれ、屋敷は字漂ノ浜にあった。その屋敷跡からかなり広大な敷地であったことがわかる。

第一四、一五、一六日 洲崎滞在 (館山市)

測量隊一行は、七月三・四・五日の三日間、洲の崎村の名主宅に滞在している。その理由は、ここから各方位の遠測を行おうとしたためらしい。しかし二日から四日にかけては毎日強い南風が吹き、またもやがたちこめて海面は晴れず、富士山・大島を見ることは出来なかった。五日は曇天、午前中は雨が降っている。この日に銚子湊までの先触れを出している。忠敬は七月五日に、頼朝の書と言ひ伝えられていたものを仁右衛門家で見たいらしい。「頼朝書千文ヲ一覽ス、建暦三年正月吉日トアリ」と書いている。

第一七日 洲の崎から滝口まで (館山市・白浜町)

七月六日 朝より晴れたり曇つたりの天候で、富士山・大山(神奈川県)・天城(静岡県)・大島の遠測を行った。測量隊は、五時半後(午前九時頃)に洲崎村を出発している。川名村(五七軒・三九五) 伊戸村(二〇五軒・六八一人) 相濱村(一〇六軒・六四四人) 布良村(一八六軒・一三〇二人)で富士山の方位を測っている。根本村(一〇四軒・六二八人、白浜町)を経て、滝口村(四〇〇軒・二二六六人、白浜町)には七つ後(午後四時頃)に到着した。宿は滝口村の名主福

原庄兵衛宅である。この日の洲崎から滝口村迄の測量距離は、三里二七町五間半（一四六五三¹/₂）であった。伊能中図には、滝口村の他に



海岸線に、「滝口村砂取浦・滝口村川下浦」の地名が書き込まれている。忠敬はこの日通過した村々の年貢高について、かなり細かく記録している。例えば川名村については、「金三両一分 船役、鑓百文 山役」、布良村については、「永四〇貫七三〇文 浦運上、永一貫六〇〇文 川舟役、永一八文 山銭、永一二文 野銭」等と、当時小物成といわれた諸年貢高まで記録している。名主の福原庄兵衛宅は紫雲寺近くの、「大家」とよばれている福原一家であり、旗本瓦林氏の代官

役も勤めていた。家は海岸線からかなり離れており、伊能中図の里程表には、「三町二間 滝口村止宿迄」と、海岸線から止宿までの距離を示している。福原家は海岸線から一三町二間（一四五五・二二¹/₂）なかに入った場所にあると、宿までの距離を明示している。

第一八日 滝口から北朝夷まで（白浜町く千倉町）

七月七日 朝六つ半（午前七時頃）滝口村を出発している。この日は朝より晴天であったが、南風で海上の視界はきかなかった。朝夷郡にり、野島崎を測量し、次の村々を通過した。白濱村（六一五軒・三三七二人、寺一〇・堂一三ヶ所） 乙濱村（八三軒・四九〇人、寺一・堂二） 白間津村（二二六軒・九二一人、寺二・堂二、千倉町） 大川村（一九軒・八九一人、寺二・堂三） 千田村（二二〇軒・八一四人、寺二・堂三） 平磯村（二〇五軒・六〇七人、寺一・堂三） 川口村（八六軒・四七五人、寺一・堂三） 忽戸村（二〇〇軒・六三二人、寺二・堂二） 平館村（二二七軒・七八五人、寺一・堂三） 南朝夷村（二四一軒・一二七四人）を経て、北朝夷村（二二四軒・一二一人、千倉町）に八つ後（午後二時頃）に着いている。宿は北朝夷村の名主重左衛門宅である。この日の滝口村から北朝夷村までの測量距離は、三里二〇町五間半（一三九八一¹/₂）であった。この日通過した村々については、寺と堂の数を記している。夜間の天体観測では、三四度五八分であった。名主重左衛門宅は北朝夷の八幡神社の近くに位置する石井道夫家である。海岸線の測量線から宿までの距離は、六町三十四間（七一五・八八¹/₂）であった。

第一九日 北朝夷から江見まで（千倉町く鴨川市）

七月八日 朝六つ半後（午前七時過）に北朝夷村を出発している。



浄照寺(鴨川市西江見)遠景

天気は晴れていたが、昨日と同じで海上は見通せなかった。瀬戸村(二〇八軒・一三三八人) 白子村(二七二軒・一四二七人) 海発村(七五軒・四一〇人) 白渚村(六六軒) 真浦村(二〇六軒、和田町)

和田村(二二八軒) 仁我浦村(五七軒) 柴村(八〇軒) 花園村(七三軒) 真門村(九三軒) 内遠野村(二〇〇軒、鴨川市)を経て、江見村(一九四軒・一〇一〇人)に、九時半(午後一時頃)に着いている。宿は真言宗浄照寺であった。この日の北朝夷村から江見村までの測量距離は、三里三〇町三七間(一五〇三七・三四)であった。夜間の天体観測は、三四度三分三〇秒であった。和田村の項に「名主五郎左衛門家大方よし」と、名主の家のことをほめる記述をしている。和田村の名主五郎左衛門家は、地元という庄司本家であるが、現在家はない。

第二〇日 江見から天津まで(鴨川市、天津小湊町)

七月九日 明け六つ(午前六時頃)に、江見村を出発している。この日は晴天であった。青木村(八六軒・四八二人) 吉浦村(五八軒) 太夫崎村(四六軒)(安房国長狭郡に入る) 天面村(四三軒) 浜波太村(離島に昔より仁右衛門という者がいる) 岡波太村(二三〇軒) 磯村(一五六軒) 貝渚村(五四二軒) 前原町(三五二軒)(伊能中図では横渚村前原とある) 東條三ヶ村(四六一軒) 濱荻村(二八八軒、名主七郎左衛門、天津小湊町)を経て、天津村(八二四軒・三三〇四人)に七つ(午後四時頃)に着いた。宿は天津村名主弥兵衛宅であった。この日の江見村から天津村迄の測量距離は、四里三町二〇間(一五九六三・四)であった。夜間の天体観測は、三五度七分であった。この日の日記のなかで、仁右衛門島のことについており、また天津村の船数について詳しく書いている。「江戸通船上下船二艘・押送船一二艘・漁船二二艘・同小船六〇艘」とあり、天津湊と江戸を結ぶ通い船があったこと、漁獲物を運ぶ押送船が一二艘、漁船が大小八二艘あり、漁業が活発に行われていたことがわかる。な

お天津村名主弥兵衛宅の場所については、いまのところ確定できていない。

第二二日 天津から興津まで（天津小湊町・勝浦市）

七月十日 明け六つ半後（午前七時過）に天津村を出発している。この日は晴れたり曇ったり空で、北風が吹いていた。内浦村（二五七軒）、忠敬は日記に「内浦村役人に渡辺喜内と云人がおり、昔からの知り合いである」と書いている。渡辺喜内は内浦村の名主を勤めたこともある家柄であり、誕生寺とは特別の関係があったという。その屋敷の位置は、「ホテル三日月」の国道を挟んだ反対側回りであったという。忠敬と渡辺喜内との間にどんな交流があったのか、具体的な点は分らない。小湊村（誕生寺領七〇石、一四三軒）を通過すると、内浦村役人と誕生寺役人が一行にお茶を勧めたが、潮の満干をみて先を急いでいたので、立ち寄らずに、測量を続けた。国界（上総国夷隅郡に入る）大沢村（滝川小右衛門代官所支配、五三軒、勝浦市）、小湊村から大沢村へは海岸線を通り、浜行川村（一一九軒）を経て、興津村（一八四軒）には七つ後（午後四時過）に着いている。興津村名主孫左衛門宅に泊まっている。この日の天津村から興津村までの測量距離は、一里一一町三九間（五一六・九八寸）であった。興津村名主孫左衛門家の場所については、いまのところ確定できていない。

第二二日 興津から勝浦まで（勝浦市）

七月十一日 明け六つ半前（午前七時前）に興津村を出発した。この日は朝より曇りで、その後小雨となった。守谷村（二二五軒）鵜原村（一四三軒）松部村（二〇四軒）串濱村（九九軒）墨名村（三四軒）を経て勝浦村（三〇三軒、岩槻藩大岡氏陣屋あり）に七つ頃（午後四時頃）に着いている。日記にはこの日の宿についての記述

はない。またこの日の興津村から勝浦村までの測量距離の記述もない。

第二三日 勝浦から岩和田まで（勝浦市・御宿町）

七月十二日 この日は晴れており、明け六つ半頃（午前七時頃）に勝浦村を出発している。川津村（一四五軒）沢倉村（三八軒）新官村（九四軒）部原村（九七軒）御宿村（三九〇軒、御宿町）を経て、岩和田村（二九一軒）に、八つ頃（午後二時頃）に着いている。宿は岩和田村名主の庄兵衛宅であった。興津村から岩和田村までの測量距離は、七里九町五二間（二八三七五・六四寸）であった。夜は晴れており、夜間の観測では、三五度一〇分三〇秒であった。岩和田村の名主庄兵衛家の場所については、いまのところ確定できていない。

○飯田橋のホテル・アグネスの伊能ウオーク「お疲れさま会」は盛況でした。

二月二五日に、伊能ウオーク本部隊に参加した会員の中山翠さんと新沢さん、大庭さんの「お疲れさま会」が開かれました。三人の報告からはじまって、全員の自己紹介もあって、たいへん和やかな雰囲気でした。新沢君のスピーチがすばらしく、2年間の成長のすばらしさに一同感心しました。

参加者は、川上、伊能洋、陽子、福田、土肥、坂本、植田、佐久間、香取、成家、伊藤栄子、座間、斎藤重則、井上、中川、斎藤仁、清水靖夫、浅井京子、矢能、首藤、白根、喜多、渡部、永野、藤岡、前田、大友、江口、大内、岡部、長岡道子、朝岡、窪谷、堀田、小池、渡辺一郎、貞子、安藤由紀子の各氏でした。安藤政彰、神戸、西川、関根の四氏からカンパを頂きました。ありがとうございます。

伊能家文書紹介十七

伊能忠敬と刀

安藤 由紀子

三つのステージ

前号で第一次測量までを書いておいたが、最後に伊能忠敬の野心に触れたのには、理由がある。後世の詮索好きは、このあたりで、彼の測量後半生の胸の内を覗いてみたくなったのである。

全部で十回の測量は、忠敬の胸の内にてらして大きく三つのステージに分けられる。細かい事実に触れる前に、短い文章でこの三つのステージの流れをおさえておこう。

一、第一次から第四次測量まで……第一ステージ

野心はどんどん膨らむ。第二次から幕府に帯刀権をもらう。測量に対する幕府の評価が上昇する。権威をまとうて行動する者の宿命として忠敬さんの頭がだんだん高くなってくる。「関所事件」「糸魚川事件」などのトラブルが増えてくる。

高橋至時と桑原隆朝は、江戸で対策を考える。おそらく堀田摂津守の了承もあって忠敬を幕臣に取り立てる案が浮上する。最も敬愛した高橋至時先生が亡くなってしまふ。

一、第五次測量……第二ステージ

先生の息子高橋景保と間重富へ、指揮官が変更になる。忠敬は幕臣になる。幕府の事業となって士分との混成部隊を率いる。名主時代に培った人を捌く力が大いに発揮される。幕府の期待も大きくなり、忠敬に社会的責任感が生まれる。

一、第六次から第十次測量まで……第三ステージ

野心が完成した。ただの名主から幕臣になり日本一の測量家になった。現地の強力なバックアップが得られるようになった。いまや体力と地図完成（達成感）との時間の勝負という認識が彼に生まれる。寿命を天命に任せること、達成の喜びも天命に任せること、という悟りに達する。

測量日記では、測量の記録以外は墨と紙をおしむかのように心ななど記さない人だが、前後関係から推理することは可能だ。三つのステージにそって、彼の心がどんなふうに動いていたかを推しはかってみよう。

名主とは

江戸後期、階層のバリアは低くなっていた。忠敬が若いころから、「頭一つ」名主層から浮上したいと思っていたことは明白である。豪農や商人が、人より頭一つ抜けるためには、医者になることがいちばん手っ取り早かった。忠敬も婿入り前、医者勉強をしたと、記録にあるから、彼の上昇志向が証明される。次に、文・理系を含めて学者になることである。僧侶になって、名をなす道もあった。隠居して風

流人として暮らす人も多かったが、芸術家としてみとめられることは、今同様難しかったろう。武士になることでさえ、お金を払えばそんなに高いバリアではなかった。江戸後期の広範な知識層の存在が確認できる。

伊能忠敬は測量に秀で、理数系の才能があり、現役時代から勉強していた。残した歌はお義理にも上手とはいえないから、風流人にはならなかっただろう。大体そんなのにんびりした人ではなかった。大変せかせかと生きた人であった。大家に婿入りするため医者になるのもあきらめた。僧侶になるには年を食いすぎている。

さて隠居後、彼にどんな道がありえたのだろうか。天文学を学んで広い視野を持ちその上で測量家になること。日本人に日本の顔を知らせること。そのために、最低でよいから幕臣になること、である。



伊能忠敬の出自、名主層はこの時代どんな状態にあったのだろうか。

領主はそれまで農民が作ってきた共同体を「村」とし年貢や夫役（ぶやく）を割り付け「村」の責任で納入させた。未納者が出ると名主層がこれを穴埋めした、このように「村」を単位とする支配制度を「村請（むらうけ）制」という。村役人は、富裕でないと勤まらなかった。ところで、村役人は無給ではなかった。初期のころは、領主が徴収米から給料を支払っていたが、江戸後期には前もって年貢米から、二％程度差し引かれるようになり、百姓たちには、自分たちが雇っているという意識が生まれるようになる。村では、すぐ紛争が起こり、その解決は長引き訴訟が増えていく。

「上に近き下に近きもの」「上よりは裾と心得、下よりは頭と心得」「名主・組頭をば、真の親と思うべき事」といった初期の雰囲気は薄れ、名主層の弱体化がはじまる。

訴訟が増えるとその費用は名主持ちだったから、「名主潰れ」が増えることになる。伊能の家もいつも訴訟にまきこまれていた。こうして没落の危機と背中合わせの状態が家の存続をはからねばならなかった。また村役人は「村」の事実上の支配を担当しながら身分は士分でなく百姓であり、兵農分離制の境目を表現する役職である。刀を狩られた方の最上層の子孫が多かったのである。ここに、村役人の抱える大きな矛盾があった。実際伊能家も、戦国時代士分であり土着した百姓であることを誇りにしていた。村役人層は自家の経営や「村」の政治関係の中で不安定な立場に置かれて、強く士分化願望をもつようになる。村民に対して権威付けをしなければ、仕事がやりにくい。

何らかの功績により士分への取り立てを願うもの、由緒・家筋の強調・誇張、時には造出、献金による苗字・帯刀の獲得、買祿、武士装束での肖像画など、村役人たちの士分上昇への欲求は大変根強かった。



伊能忠敬記念館蔵

あいまいな資格 (第一次から第四次まで)

第一ステージの忠敬の資格は、第一次の蝦夷地測量が「元百姓・浪人」で、あとの三回は「天文方高橋作左衛門弟子」である。幕府の「御触れ」はあったものの、資格のはつきりしないことが、受け入れ方のこの分国支配の膨大な官僚たちを悩ませた。

第一次の一行六人はもちろん武士はおらず、忠敬の身内や身近な若者だった。忠敬の強気をよく知っている高橋先生は、出発のとき「なるべく目立たぬように」と再三注意しているが、渡辺一郎氏によると忠敬のアイディアで、御用旗を立てた。これは目立ったに相違ない。

第一ステージの待遇は、概してあまりよくなかった。御触れの伝達は上首尾とはいかず、始めのころは出迎え、案内なども途切れがちであった。藩によって忠敬の資格に判断の差があり、粗略にされることもあった。加賀藩では一行は散々な目にあっている。始めは頭(ず)の低かった忠敬も、「不埒である」と思うようになる。

彼は「武士」になったかった。この分国支配の列島をまわるといってやり始めた仕事のためにも、どうしてもなりたかったと思う。

忠敬と苗字・帯刀と待遇の関係について年譜を作ってみたので見ていただきたい。

天明三年九月 領主、苗字・旅中帯刀を許可(39才)

寛政四年二月 領主、三人扶持を与える(48才)

寛政六年十二月 領主、隠居許可 隠居扶持一人分与え勘解由への改称許可 忠敬隠居扶持を辞す(50才)

寛政十一年十二月 第一回箱訴(55才)

寛政十二年一月 第二回箱訴

寛政十二年四月 第一次測量(56才) 資格 元百姓・浪人 手当日銀七匁五分

享和元年一月 「箱訴」の申渡し。幕府より勘解由親子に各銀拾枚と苗字は代々、帯刀は其身一代許可(57才)

同年 四月 (このタイミングのよさ！)

第二次測量 資格「天文方高橋作左衛門弟子」手当日銀十匁 この時から「長持ち」がつく

享和二年六月 第三次測量(58才) 資格「同右」手当日金六十兩 一定量の無賃の人馬

享和三年二月 第四次測量(59才) 資格「同右」手当日金八十二兩二分 同様の無賃の人馬。糸魚川事件起こる

文化元年九月 將軍、地図を見る。(60才)

四日後、資格「天文方出役 小普請組十人扶持 天文方手付手伝い」ついに幕臣となる。

史料 一 「伊能忠敬測量日記 一」 千葉県史料 近世編

(いよいよ第一次測量の許可状を貰う段になって次のような事が問題になった。時代が見えて、おもしろい)

下勘定所へ出頭した。出立の形をお尋ねになったので、自分は帯刀して、弟子にも佩刀の者を召連れると申上げたところ(領主からだだが、帯刀の権利のあるのは忠敬のみ)この件についてお糺しがあった。そしてこちらからも領主(佐原の領主津田氏・六千石の旗本)に糺すので早

速知行所に掛け合うようにと仰せられた。直ちに領主方へ出向きご家老にも相談したがまったく埒があかなかつた。

いつもお金の面倒を見ているのに言を左右にして弟子の佩刀は許さなかつたらしい。いくら「試みの測量」でも自分のお金で行くのだから、権威付けたい気持ちにはよく分かるが、急にもう一人苗字帯刀を許せといわれても領主の方も困つただろう。結局二本差しは忠敬だけであつた。刀のもつ意味は絶大であつた。忠敬が権威に弱いというよりは、周囲が弱いのを利用して、仕事をスムーズに運ぶため、「刀」にこだわつたのである。

地図が次第に評価され、お手当ても増額されたのに資格だけはもとのままであつた。忠敬の強気は遺憾なく発揮され、しだいにトラブルが増えていつた。そして、臨界点を超えて「関所事件」や「糸魚川事件」が起こつた。これらについては、渡辺一郎氏の著書に詳しく言及されている。

測量はすべて忠敬にとつては勝手知つたる名主層が相手の仕事である。彼が話をしたのは、おそらく何千という村役人であつた。しかしその後ろには各藩の官僚組織が控えていて、目に見えない圧力になつていたのである。

箱訴

忠敬は、用意周到な人物である。強力な後ろ盾があつて(若年寄・堀田摂津守と桑原隆朝)多数の農民の二度にわたる訴えがあれば、幕府から苗字・帯刀の許可だけでも得られるかもしれないとふんだのだろう。測量前に、活動開始である。

史料 二 A九〇―二 箱訴二付申渡書

享和元年一月
世田谷伊能家文書

下総国 佐原村

同人親

三郎右衛門

勘解由

その方共先祖、天正年中佐原村へいたり居住せし以来、

代々村方の為ニ相成よう心懸け、引続勘解由も、右申送りを守り、

村内困窮人等相憐み、類焼に逢候ものへ米銭食類等を与え、

凶年又は出水等之節には 村内ハ勿論近郷迄も夫食貸渡し

或は与え 貧窮で年貢納めがたき者には、代納し、

米穀払底高値の節も 窮民救済のためいろいろ心を用い、 (中略)

奇特の志に付、御褒美として三郎右衛門へ銀拾枚くだされ、苗字は子孫まで名乗り帯刀は、その身一代お許しなされ、勘解由へは銀拾枚くだされ、苗字帯刀ともその身一代お許しくださる

これが三つの村の百姓十名と忠敬父子をお白洲に呼び出して、御勘定役人が読みあげた、申渡し書である。

附属文書は、百姓に対し「二人の善行を寛政十一年と十二年の二度にわたつて箱訴し神妙の事に付き褒め置く」というものと、御縁側に控えていた三村の領主の家来たちに「この旨各主人へ報告すること」というものである。

後に付け加えられたらしい説明によると、現場は、勘定奉行柳生主膳正のお役宅で、二人の御勘定(申渡し人)が上段、御縁側に三村の領主家臣、忠敬以下百姓は御白洲という物々しい情景だったらしい。やつと幕府から、苗字・帯刀の権利を得たのである。

これにかかった膨大な費用は全額伊能家で持ったのであるが、このからくりを考え出したのは忠敬であろう。もちろん桑原隆朝と相談の上だろうが。

いつごろから想が練られたのか考えてみると面白い。もう一度年譜を見ていただきたい。第一回の箱訴が寛政十一年である。こういうことにはたたくさんの人の力と時間がかかるから、農繁期や年貢の納め時は、はずさなければならぬし、発想は一年前と見ておいた方がいい。

「蝦夷まで歩いて測量したい」という忠敬の「大ぼら」は寛政九年であるからこのころからすでに発想されていて、彼は決して大法螺を吹いたのではないことも証明できる。

幕府から得た苗字・帯刀の権利は第一回には間に合わなかった。幕府も結果を見なければおいそれとは、与えなかっただろう。なにしろ「測量試みのため」遣わされたのであったから。

孫に与えた刀

無味乾燥な地名と数字が延々と続く測量日記だが、宿泊地の評価の書いてあるところだけ拾い読みしていると、亭主の挨拶を受けながら、あちこち観察している忠敬がいる。村役人の家が多いから自家とくらべているのだろう。「家作よし」とか「庭も大いによし」とか、床の間の軸などもその土地に由来のあるものを書き写している。

公儀から帯刀権を貰ったものとして、家格には大変敏感である。第三次測量で越後村上領に入ったとき、「廿一日……宿、年寄惣左衛門、領主より帯刀、家作よし」「廿二日……庄屋佐藤三郎右衛門立寄り、この佐藤氏新宅普請できあがらず、よって宿をなさず、公儀より永々帯刀扶持を仰せ付けらる、二人扶持……止宿平野安之丞、永々苗字佩刀

三人扶持仰せ付けらる。奇特の儀は別に写し置く」などと書いている。磁石がくるうので、忠敬が実際に差していたのは粗末な竹製の刀であったが、測量風景の絵を見ると大小を下男が持つて歩いている。大切な旗印だったのだ。後半になると、これに「槍」までつく。受け入れ方の村役人文書によれば、忠敬が泊る部屋の床の間には、お触書をのせる三方と刀懸けを置くことになっていた。

◇

文化八年九州第二次測量出発の前に、忠敬は今まで持っていた大小を孫の忠誨に与えた。もう刀の権威は要らなかったのだが、どこかの殿様にもらったか、新調したのだろう。

文化九年正月二日付の書状で次のように書いている。

「三治郎、銀仕立ての大小の刀を喜んでいますか。帯解（おびとき）までは損じることのないよう、よく言い聞かせてください。私が長い間国々を回りながら身につけていたのですから、大いに縁起の良いものです」

人間が権威のシンボルと思い込んだものの力は、大きい。しかしこれをうまく使って、境目無しのまるごとの日本を提示し、近代への道を開いた人の野心と根気と実行力には、その人の多少の俗物性を吹き飛ばす爆発力がある。

◇参考文献

「日本の近世 7・8」

中央公論社

渡辺一郎 「伊能測量隊まかり通る」

NTT出版社

「伊能忠敬測量日記 一」

千葉県史料 近世編

『箱訴二付申渡書』

世田谷伊能家文書 A九〇―二

「伊能忠敬書状」四

千葉県史料 近世編

伊能忠敬と八王子千人同心

加藤 巷児

戦国大名武田信玄（一五二一〜七三）は、軍政・民政を統率して、中央集権的な体制を確立するため、人材の登用をはかるとともに、家臣団の編成とその強化に努めている。その構成は次のように分類される。

① 親類衆 ② 御譜代家老衆 ③ 足軽大將衆 ④ 旗本・諸役人

⑤ 地域的武士団（辺境武士団） ⑥ 占領地域武士団 ⑦ 海賊衆

この、④旗本・諸役人のなかの小人頭Ⅱ中間頭が千人頭の前身といわれる。小人頭は九人が各三十人の小人・寄子を預かり信玄居館の番家で、一夜交代で番役を勤め、さらに領国の主要な道の警備に当たる筋奉行を命じられたのが始まりといわれている。

一五八二年（天正十年）甲斐武田氏は織田信長・徳川家康の連合軍に滅ぼされたが、家康は、甲斐・信濃の支配にあたり、できるだけ武田旧臣を拔擢・登用し旧所領を安堵し徳川家臣団に組み入れた。

家康は、小人頭にたいして甲州口の警備と治安維持を主目的とし、合わせて江戸防衛、日光東照宮の警備等を使命とする、農兵未分離による軍事的機能の継承と位置付けたものと考えられる。小人頭は「甲州御小人頭」と呼ばれ、「十人頭衆」となっている。（一五九〇）

後、当時の蝦夷に派遣された原半左衛門胤敷の祖である原半左衛門胤従もその一人である。寛政十一年三月（一七九九）原半左衛門胤敷は幕府に、蝦夷地に渡ってロシアの千島・カラフト・蝦夷地への進出に対抗して、警備と開拓に当たりたい旨願出た。

願いは寛政十二年正月に許可される。同三月二〇日に原半左衛門胤敷の弟新介が四十三人、翌二二日には、原半左衛門胤敷が五十七人をそれぞれ引き連れて蝦夷地に向かった。原新介はユウブツ（苦小牧市勇払）に、原半左衛門胤敷はトマリ（白糠町泊）にそれぞれ会所を設け、任務に就く。出発の時期からみて現地への到着は寛政十二年（一八〇〇）四月末くらいだったろう。

一方、伊能忠敬は、第一次蝦夷地測量に江戸深川を出立したのが寛政十二年閏四月十九日。三厩で風待ちに九日を費やし、それでも箱館に着けずに吉岡（福島町）に上陸したのが五月十九日である。

忠敬隊は福島・喜古内・箱館・大野村・鷺ノ木村（森町）・山越内（八雲町）・長万部・礼文華（豊浦村）・虻田・室蘭・幌別・白老を経て、勇払に到着したのが六月二日（旧暦）で、白糠（白糠町）に到着したのは七月二二日である。

帰路は西別（別海町）・クスリ（釧路）を経て白糠に戻ったのが八月十五日、広尾（広尾町）・様似（様似町）などを経て勇払に着いたのが八月二九日であった。

私事であるが、仕事の関係で苫小牧に一〇年以上も滞在していたことがあるので、勇払の町はずれにあつた八王子千人同心の、一部の方々のお墓を見に行つたことがある。はからずも、苫小牧市では、今年が八王子千人同心の、勇払着任二百年ということで、各種の催しがあつたという。

忠敬の測量開始二百年、しかも同時期に勇払に宿泊しているので、何らかの接点を求めて、測量日記と八王子千人同心の資料を当たつてみた。

忠敬の「寛政十二庚申蝦夷千役志」（第一次測量日記）から抜粋すると、次のような記述がみられる。

○寛政十二年（一八〇〇）六月二二日（旧暦、以下同じ）・勇払
此所の詰合は御小人目付高橋治太夫殿御他行、八王子千人同心原半左衛門殿、弟、同新介殿なり。医師月輪安済、大司馬伊織に對面。此場所蝦夷家なし。人家会所共四軒あるよし。

（高橋治太夫は勇払会所の責任者である幕吏、医師は幕府が直轄支配した際に江戸から派遣された御雇医師のこと。幕府は寛政十一年東蝦夷地の直轄にともない、この地方の場所経営も請負人を廃して幕府の直掬とし、勇払地区はこれまであつた十五場所の運上屋を一つに統合し勇払会所とした）

○寛政十二年（一八〇〇）七月六日・猿留（えりも町）

曇天、午中に薄曇、太陽を測量。六ツ半頃まで曇る。五ツ前より晴。此夜勾陳奎九を測る。此所にて八王子千人同心原半左衛門殿手附橋本忠兵衛、石川半兵衛、沢田与八、三人の衆へ同宿。

○寛政十二年（一八〇〇）七月二二日・シラヌカ

シラヌカ着、此所の詰合八王子千人同心頭原半左衛門殿、その外同心衆へ見舞、飯家に止宿。手付同心の中吉田元治殿旅宿に来たり天文を語る。自製の天球を出す、春海子の方図、並に円図を用ゆ。細工大いによし。

○寛政十二年（一八〇〇）七月二三日・シラヌカ

原氏の手付石坂重治郎、肝煎前島新兵衛その他の外八木庄蔵、坂龍右衛門旅宿に見舞いに来る。

以上の四件の日記に八王子千人同心の名前が見られる。

この他、「蝦夷地ゆうふつ原野」千人同心苦闘の哀歎・岸本安則著（一九八二年・六興出版）に、同様の記載があり、日付の点で疑問があるが、その内容に

「五ツ刻頃よりシラオイを出立し、トマコマイ・コイトイで昼食、この辺り花菖蒲多くあれど、辺境のせい五月というのに、咲き出でん様子さらになし、盛りの頃はさぞかしと思われる・」との文が紹介されている。私の経験でも、勇払原野に群生する野百合、花菖蒲の開花は現在でも変わらず、忠敬さん達も同じ花を見たと思うと、何か非常に身近に感ずるのも感傷だろうか。（二〇〇〇・十一 記）

参考文献

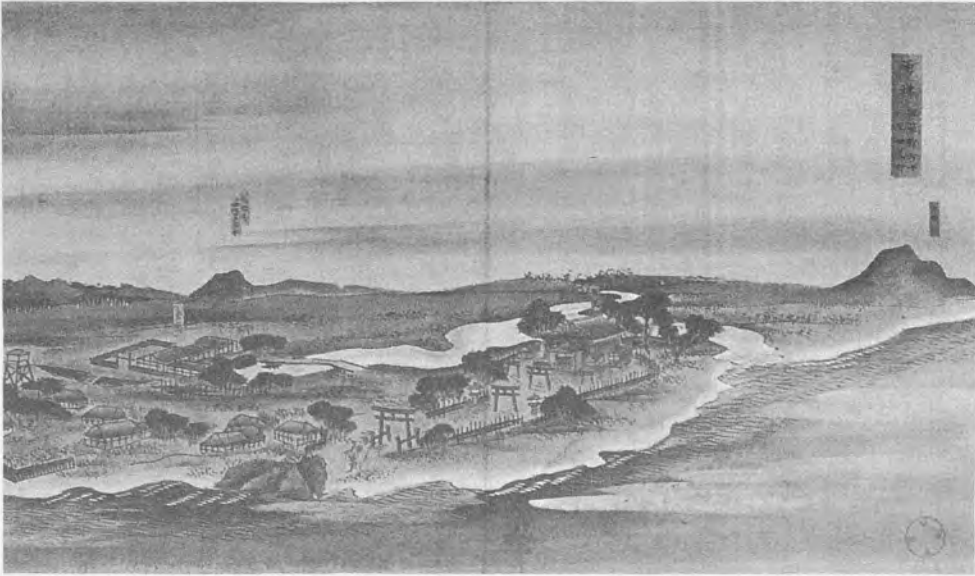
- 八王子史教育委員会 『八王子千人同心史 通史編』平成四年三月
村上直 編著 『江戸幕府 八王子千人同心』雄山閣 平成五年三月
佐久間達夫校訂『伊能忠敬 測量日記第一巻』大空社 平成一〇年六月
千葉県史料近世編『伊能忠敬測量日記一』千葉県昭和 六三年三月

北海道大学図書館蔵 北海道歴検図 解説

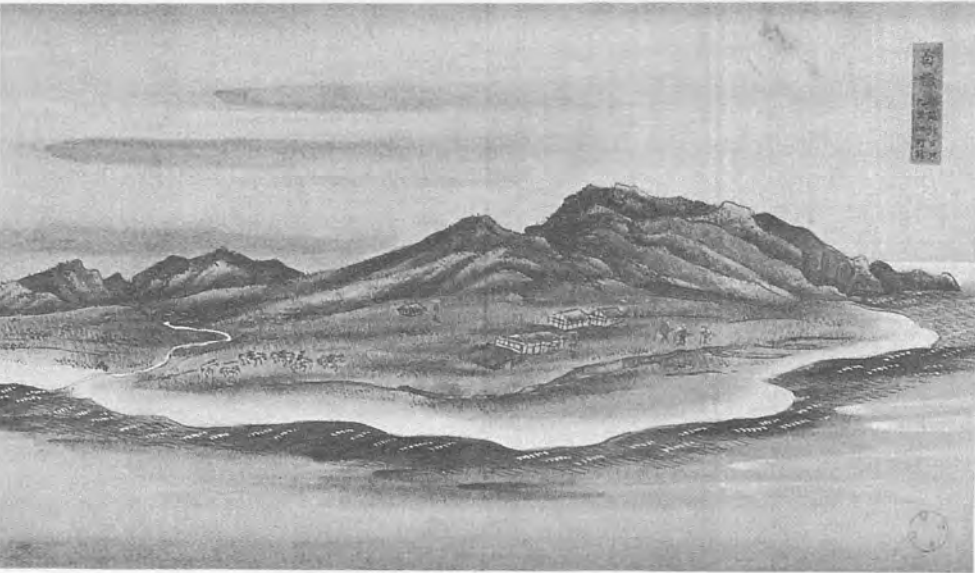
本図は、谷文晁（1763—1840）の門人目賀田帯刀が、1857年頃描いた極彩色の眺望図である。忠敬の蝦夷地測量より約六〇年後の幕末の北海道の様子を描いている。二〇〇〇年十一月の伊能忠敬記念館「伊能忠敬と北海道」展の説明により解説する。

（上）勇払 左：会所 右：弁天 と注記がある。勇払の名の下に「距箱館六十三里三十町」と記載がある。右下の円で東西南北の方角を示す。上：西 下：東 右：北 左：南 である。

(下) 白糠 左：弁天 右：読みとれない。白糠の名の下に「距箱館百三十九里四町余」と記載がある。右下の円で東西南北の方角を示し、図では、上：北 下：南 右：東 左：西 である。



なお、2000年8月5日から9月3日まで苫小牧市博物館において、特別展「八王子千人同心と幕末の勇武津」が催され、地元紙の「苫小牧民報」に次のような記事が掲載されている。



『延叙(えぞ)歴検図』目方田帯刀(めかたたてわき)が明治4年(1871)自ら手掛けた「延叙歴検図」を、北海道開拓使の要請によって、再写した絵図。「歴検真図」は目方田が安政3～5年(1856～1858)に幕府の命で、蝦夷地・樺太の地理を調べ、各地の沿岸を描いた美麗な風景画。目方田は、江戸時代後期に江戸文人画壇の重鎮として活躍し、門下生として渡辺崋山などを輩出した画家で、谷文晁の娘婿。弟介庵(かいあん)とともに文晁の門に入って画を学んだ。ここでは目方田とある。

芳名録

より — 佐原伊能家を訪れた人々 —

「芳名録より」余録

伊能 陽子

二三号でご紹介した「葛原しげる」についてお二人の会員からお知らせをいただきました。嬉しいことです。山本さんは、母校三河台小学校校歌の作詞者が葛原さんだったと、小学生時代に戻ったようなお顔で懐かしそうに話してくださいました。また、福山市の菅波さんが、沢山の貴重な資料を送って下さいました。お手紙の一部を紹介させていただきます。

―前略―「葛原しげる」につきましては、郷土の名だたる人ですが地元では充分な資料整理がなされていません。私の保有する資料の内の「福山学生会雑誌・No.66・昭和三年八月刊」に葛原氏の投稿による「伊能忠敬先生の備後地方の測量日記」がありました。「福山学生会雑誌」は、東京本郷丸山の旧福山藩主・阿部家の邸内にあって、備後地方出身の旧高校・大学への入学者を受け入れた学生寮の同窓会誌で、大正時代より昭和十九年頃まで、東京で年二回出版されました。その頃に佐原中学校の雄弁大会に招かれています。―後略―

次は、その福山学生会雑誌に掲載されている葛原氏の前書きです。「千葉県立佐原中学校地理科担任なる伊達教諭が備後の出身です。二十数年同校に教鞭をとられている事は、今年、六月十一日、同校の雄弁大会に招かれて行くまで知らなかった。六月十一日というは実に、伊能先生が、年五十余にして志を立て、郷里を後にせられた記念日であった。此の日、備後の僻村でも話にきいた忠敬先生の勉強せられた書斎も拝見した。中学校での記念品展覧も許された。その中で私は安芸の宮島の地図が目についた。及び、筆で書かれた測量日記の多いこと、その清書とが、私を驚かした。それ以上の驚きと嬉しさは、忠敬先生が備後にも足を入れ、親しく測量なされた日記があることを知った時である。かくて、私は伊達教諭に依頼して次の転写を願っておいとところ、忠敬先生の後裔の方の好意と教諭の努力とに因りて、此の珍重すべき日記をご紹介する事を得ることになった。」これで葛原氏が佐原においてになった事情が明らかに、私の疑問は解決いたしました。

備後
創
業

大正七年
伊能先生
送文様

富谷鉦太郎

富谷鉦太郎―とみやしょうたろう― (一八五六―一九三六)

明治・大正期の司法官僚。栃木県出身。ドイツに留学後、東京地裁判事から東京控訴院長をへて、大正十年大審院長に就任。退官後、明治大学長などをつとめた。

(三省堂コンサイス人名辞典)

忠敬ドラマ制作者への参考 感動の五〇場面

人間・伊能忠敬の生涯（私稿）

渡辺 一郎

はじめに

最近、伊能忠敬がテレビ、演劇、映画でとりあげられることが多く、内容について筆者はよく相談をうけるが、ほとんど思うようにはいかないのが残念である。その理由は簡単で、伊能忠敬の生涯を物語風に描いた名作がないことと、脚本家が自分でよく調べ、勉強して書くという時間がないことである。

井上ひさしの『四千万歩の男』は、我々が先鞭をつけた今回の伊能ブームより遙か以前に書かれた小説である。井上さんは、シドニーに滞在していたとき、伊能忠敬の史料をみて感じるどころがあり、書き始めたのだという。無味乾燥な忠敬の測量日記に、同時代の面白そうなフィクションをくわえて楽しく読ませてくれた。戦後、伊能忠敬の名前を広める上でたいへん大きな役割を果たしたとおもう。

忠敬研究の決定版として著名な大谷亮吉の『伊能忠敬 岩波書店大正六年刊』は、三井財閥からの二千万の寄付を基金として、帝国学士院（現在は日本学士院）の事業として一〇年もかかって編纂されたものである。伊能図についての解説が不備なこと、歴史的な記述については独断と偏見も少なくないこと、などの欠点があるが、測量器具、測量方法の記述は詳細である。測量方法ならこの本である。暦学と数学の部分が抜けているが、忠敬の伝記、測量、伊能図などについてのまとまった研究書は他にないので、刊行後八〇年になるが、いまだに基

本文献としての価値を持つており、このたび復刊されることとなった。

戦後の研究者では、保柳睦美氏が『伊能忠敬の科学的業績 古今書院刊』において、伊能図の調査からはじめて、忠敬の業績を偉人伝ではなく、科学的に分析評価をおこなっている。大谷批判が随所に出てくるし、理論的であるが、入門者にはやや難解である。

本会役員で佐原市の浄国寺住職・小島一仁氏は、大谷氏が使わなかった史料をもとに、一九七八年に『伊能忠敬 三省堂選書』を著して、佐原における伊能忠敬について明かにした。二〇数年前になる。普及書であるが調査の行き届いた信頼に値する内容である。読みやすい本であるが、佐原のことが中心である点に注意が必要である。

結果的に今回の伊能ブームの先発をつとめることとなった拙著『伊能測量隊まかりとおる N T T 出版 一九九七年刊』は測量日記にもとづいて、伊能測量の進行と伊能図制作の時間的経過を追いつながら、各地の協力と測量風景を叙述したもので、史料にもとづいて事実を積み重ね、推測の部分は分かるように書いてある。3800円の高価な本であったが、発売一年で五刷りを重ねた。

地図を中心とするならば、江戸東京博物館の図録として発売され、市販もされた伊能忠敬研究会編『忠敬と伊能図』がある。掲載する伊能図カラー版のボリュームでは断然他を圧している。これより地図の説明をさらに充実させたのが拙著『図説 伊能図を読む 河出書房』である。伊能図のことを知りたいのであればまず本書である。

史料というならば、千葉県史料『伊能忠敬測量日記』と本会役員佐久間達夫氏の『伊能忠敬測量日記 全六巻 大空社』である。

以上の各著書は忠敬について書く人にとっては必読の書である。ところが手間ひまを惜しんで、少しばかり読んで、あとは勝手な憶測をあたかも真実であるのごとく書き散らす類が多い。それでもフィク

ションと断っているものはまだいい。実録風な書き方は読者を誤らせるものである。

古い書物がいいわけではない

忠敬についての著書は戦前にも多数出版されている。古ければよいとばかりに、古い著書から、これまでに明らかに否定されている言い伝えを拾い出してくるのも全くだけでない。例えば、忠敬は伊能家の奉公人をしていて婿に直ったとか、初めの妻ミチは忠敬を尻にしいていた悪妻という説である。奉公人説は大谷氏により八〇年も前に否定された話であり、悪妻説も小島氏が史料にもとづいて明確に否定している事柄である。

また、戦前の本はどれも偉人伝の性格がつよい。現代では、どこが偉いのか、いつぼう、どんな欠点があったのかを、明確に理由づけて説明しないと納得されない。ここらに迫らないから、古い話だと一笑に付されて終りだろう。

忠敬の人生は、生涯そのものがドラマであって、フィクションの変なお芝居をくついたり、有名役者を揃えて、熱演させなくとも、坦々と描いて呉れば人々を感銘させることが出来ると私は信じている。ときどき放映される忠敬を題材としたドキュメント風な歴史番組の視聴率がそれを証明している。お芝居で客を引くのは第二段、第三段でよいとおもう。

ところが現実の演劇、テレビなどは史実を無視して、技巧にたより過ぎている。余計なことをしているのである。ここらある忠敬ファンに背を向けさせて成功するとは考えられない。まずは、ほぼ史実に沿って脚色をおこなうというのが筋だと思ふ。

とはいうものの、忠敬の名前が知れ渡るのはいいことではないから、

足を引く張るつもりは少しもない。より効果的に感動を呼び起こし、忠敬ファンを増やしたい気持ちからである。この点については御理解をいただきたい。

現実的なことであるが、映画、演劇、テレビなどは、商業レベルで生産されるから、どうしても効率性を追求しなければやっていけないということがある。御用とお急ぎなのである。台本といつても、大急ぎでやつつけなければ仕事にならない。忠敬をよく知っている脚本家などいないのだから、種本をきめて、面白そうなどところをつまみ食いすることになる。

目下のところ、忠敬物の最も有力な種本は井上ひさしである。小説なのだから、たくさん転がっている面白そうな話をつまみ食いしてお茶を濁すことになる。『四千万歩の男』の描く伊能測量は、第二次測量の三分の一くらい、測量日数にして244日分、全体の6・5%にしかあたらない。その他については、本当は前掲書を勉強すべきなのであるが、時間も無いし、山場もわからない。結局、かわりのありそうな人物を登場させて、お芝居を作り、適当につなぐということになりやすい。

ようするに忠敬の生涯を分かり易くまとめて、山場を明かにした種本がないからそういうことになるのである。種本をつくるといつても簡単ではないので、忠敬の生涯のうち、ドラマチックで、取り上げるにふさわしい場面を列挙して、今後の参考に供することとした。

分量はこんにち最大の時代劇ドラマであるNHK大河ドラマでも充分なように五〇場面とした。退屈しないで、充分構成が可能と考えられる。

おいおいに、一場面を一頁くらいに描いてみたいと思っているが、

まずは各場面の梗概だけを述べる。今後の忠敬ドラマ製作者の参考になれば幸いである。各場面は興味を持っていただくとため若干脚色した部分もある。

一 伊能忠敬・幼名三治郎の母の死

九十九里浜の中央、小関（こぜき）村の小関五郎左衛門家の姉家督であった母「みね」が急死。親族会議難航。父（41才）は家督を妻の弟に譲り、幼い6才の三治郎の教育を託す。兄（14才）姉（11才）をつれて実家に帰る。

三治郎、漁具小屋の番人をしてながら寺子屋に通う。利発な少年、算術が得意。漁具小屋で読み・書き・算術を復習。夜九十九里浜で星を眺める。（少年期は勉学の機会がなく、漁具小屋番人だったというお話は根拠なし）

二 父が迎えにくる。三治郎喜ぶ

10才のとき父が迎えにきて、小堤（おんずみ・横芝町）に引き取られる。父の実家・神保家は小堤村の名主であった。神保家の先祖は近くにあった坂田城の城代家老であった。小田原落城後に帰農した。一族からは地方俳諧の宗匠を輩出。父も俳句をたしなんだ。

三治郎が青年時代を送った山河は住みやすい土地だった。神保家はそこで最大の地主だった。しかし、父はまだ分家でできなかった。

三 生きる道を求めて奉公にでる

父は二年後に後妻（戸村氏35才）をもらう。父や親戚の配慮で生活の道を探すために奉公に出される。僧になるか学者になるのが身を立てる近道だった。寺、土浦の医師、親戚の平山家などを遍歴。算学

とマネージメントの才を示す。

四 佐原の伊能家では婿探し

佐原の酒造家・伊能三郎右衛門家では当主が亡くなって、未亡人の家付き娘のミチ（21才）が婿を求めている。親戚の伊能七左衛門が婿選びを進め、親戚の平山家の推薦で神保家の三治郎が浮上する。

五 忠敬と改名、入夫

親戚と父親の縁談に三治郎うなずく。相手は四才年上の子持ち。しかし、伊能家は佐原の名門、養子旦那として働く決意をかためる。神保家も名家だが父は次男で出戻りだった。箔つけのため、平山家の斡旋で、林大学頭に入門し忠敬（ただたか）と名前をつけてもらう。

平山三治郎忠敬、婿入り行列の風景。伊能家、人足を出して荷物を受けとり祝儀を出す。披露の宴会の模様など記録がある。

六 河岸一件

伊能家の家業に出精。徹底した合理性と創意工夫。自宅で作れる野菜や大根は買うな。

田沼意次の河岸運上政策のとばっちりで、勘定所に出て佐原河岸の権利を争う。河岸問屋の権利を守り、運上金を値切る。

利根川の水防にも尽力。江戸へ出府の際は同族の先輩で国学者・楳取魚彦を訪問、国学を聞く。先祖の残した膨大な書物を読む。

七 天明の飢饉を切り抜ける

天明五年、凶作を見越して米を買い付ける。予想に反して米は上がらず、親戚に損切りを勧められるが頑張る。

六年に水害が起こり飢饉となり米暴騰、佐原で窮民に施す。残りを江戸で売って大利を得る。

祭礼のもつれから、両家といわれる永沢と義絶。

八 妻ミチを失う

夫妻で奥州へ旅行し「奥州紀行」を著す。三八才のとき妻ミチを失う。ミチは悪妻ではない。家を思う気持ちは強かったが、亭主をよく立てた。永沢家との間の領主への進物争いの書状でよくわかる。

ミチのあと、のちに一四才から測量に従った秀蔵の母（法名妙諦）と暮らす。手代の柏木久兵衛の娘。記録に出ない2人目の妻。（記録はないから描写は自由である。）寛政元年死去。

九 医師・桑原隆朝と知り合う

仙台藩の上級藩医桑原隆朝（りゅうちょう）の知遇をうける。（機縁不明だが、伊能測量の蔭のキーパーソン）娘のお信さんを三人目の妻にもらう。出戻りだが、美形の才媛。華やいだ気分となり屋敷を江戸風に改造、学問に傾斜、領主に隠居を願い出るが、領主の代変り直後なので不許可。家訓を書き、事実上仕事を息子に任せる。

一〇 お信を失う

お信、病氣治療のため、江戸の父のもとに戻っていたが死去。忠敬、慟哭し、隆朝に詫げる。佐原の旦那衆は隠居後好きな道に進む風潮があった。忠敬、引きどきを感じ、同族の先輩・榎取魚彦を思う。

一〇の二 義父隆朝、忠敬を慰める

大坂玉造組の同心・高橋至時が天文方任命の内示をうけ出府すると

の情報を与え「天文・暦学ならこの人だよ」とささやく。「望むなら摂津守様にお願ひしてもいい」忠敬「お願いします」。ここで天文暦学への志を固め、隠居を願い許可される。

一〇の三 至時、間、忠敬の出会い

寛政七年四月、至時は内命をうけて出府。永田馬場山王脇の岡部藩主の阿部家上屋敷に寄寓する。

同年五月、忠敬は江戸に出て江戸店の近くの深川黒江町孝七店に隠宅を構える。すぐ裏が水路で交通至便の一等地であった。

桑原隆朝、堀田攝津守を大手前の江戸屋敷に訪ね、忠敬の高橋至時への入門仲介を懇請する。ほかならぬ桑原の依頼なので、攝津守、すぐ至時をよぶ。至時、駆けつける。忠敬は入門がかない、黒江町から永田山王まで通って勉強を始める。

忠敬は至時から、將軍拝謁のため登城するときの、槍、大紋などの支度の援助を頼まれ、喜んで走りまわる。

同年六月、高橋と同様に、寛政の改暦を担当するために、江戸出府を命じられた大阪の富商で暦学者・間重富も江戸に到着する。

一一 寛政の改暦がはじまる

寛政七年十一月、高橋至時は將軍に謁し、天文方を拝命する。いよいよ改暦の作業がはじまった。

（白河藩邸）定信と堀田攝津守

「今日、高橋至時は將軍に拝謁いたしました」

「さようか」

「少將様の夢が実現しますね」

「有徳院様（徳川吉宗）もお慶びだろう」

「天文方の面倒をよく見るよう」

「しかと承りました」

一二 忠敬、自宅に観測所を設け、高橋役所に通学

至時と間に、用意する器械を相談、三〇〇両を用意して自宅の庭に観測所をつくる。物干しではなく地上に。

（膨大な機器のイメージがわかるよう、動なくてもよいが実物大の器具模型を並べる。圭表儀、大象限儀、望遠鏡、子午線儀など）

蔵前の天文方・高橋役所への通学風景。

観測の虜となる。毎日太陽の南中高度を圭表儀で観測。観測に支障が出るので外出を嫌う。暦局で話していても、観測時間になると慌て帰る。めがね、脇差、懷中物などをよく忘れた。

夜は多数の星の高度を測り高度表を作る。熱心なので、日中の金星南中を日本で初めて観測する。観測ができない雨の日以外は、ゆっくり雑談もすることもなかった。

至時の京都出張中は間重富が代講。西洋の天文学を含む曆象考成後編というような難しい天文学書を理解する。

一三 天文方で地球の大きさの論議が起る

曰く、緯度一度は三〇里くらい、いや、そんなに大きくはないだろう、いずれにしても定説はない。聞いていた忠敬は

「暦局と自宅の緯度差は一、五分。その間の距離がわかれば緯度一分が求められる」と緯度一分の距離を実測し学問的業績を残す気になる。

深川から浅草まで歩測し、曲がり角で密かに方角を測る。一尺は鯨尺を使った。一步は六九センチ。

一三の二 測量図を完成し、緯度一分の計算値を提出

師匠はいくら何でも、深川と浅草を測って、地球の大きさをきめるのは乱暴過ぎるという。ではどうしたらよいか師弟で問答。

一四 蝦夷地までも測つたらいののではないか

「お金は出ないと思うが、学問のため、やってみる気はないか」
「やりましょう」

至時、蝦夷地御用掛に申請書を出す。

忠敬、第四の妻お栄をくどき、蝦夷行きを納得させる。

至時、申請書を桑原にも見せて援助を依頼する。桑原は攝津守の内覧に。摂津守から、これからは提出以前に持つてこいといわれる。

一五 御船手役人荷物を調べに来宅

測量荷物の調べがある。忠敬は携帯する器械を新たに発注、予算七〇両。旅の準備にかかる。お栄をなだめるのが大変。しかし、命令が出ない。桑原隆朝に相談。

桑原、攝津守を訪問。「決まっているが、蝦夷地に事件が多くて奥州街道が混んでいる、来年にできないか」といわれる。

忠敬「器械を発注してしまった。持参する道具を減らしてもいいからぜひにと懇請」

ついに御徒目付より辞令が伝達される。

一六 第1次測量の旅

ルートを字幕で追う。命令書の朗読解説。

お栄を佐原の親戚に預ける。

歩測しながら街道を進む（近景、遠景）一行。曲がり角では測線の

北に対する角度を測る。近傍の目標を測る。遠山の方位も見る。

忠敬、作業の合間に内弟子たちに講義する。

夜は天測。天測作業の描写。

蝦夷地は行けどもゆけども広大。襟裳岬の難渋。ニシベツで根室への出船を断られ、引き返す。

一七 蝦夷地の地図を上呈

師匠・高橋至時、激賞する「私が細かいところまで、指示をしたが蝦夷地まで歩数を当り、星の高度も七四箇所も測ってきた。よくやってくれた」と。お栄も手伝った。

とうじの蝦夷図と対比する。

堀田摂津守をへて、溜りの間で、老中首座・松平信明および先の將軍補佐役・松平定信の内覧に（至時の説明で）供する。

信明「これなら関東一円の図も作れるのではないか」

定信「伊豆から本州東海岸の図をつくりたいな、できれば東日本の海岸線を明らかにしたいものだ」

摂津守「それにしても、蝦夷地一円の地図がまず先と思われませんが」

一同「それはそうだ」

一八 第二次測量計画

隆朝から蝦夷地一円の測量願いを用意するようにいわれる。忠敬は蝦夷地に宿が少ないことを考え、函館で船を求め、船に寝起きして蝦夷地周回測量をおこなうよう提案する。至時にも見せた上で隆朝へ。

隆朝は攝津守の内覧に供し、無理だといわれる。隆朝から至時に願書は書き直し、船の件は口頭で申し出るよう伝えられる。忠敬反対。

「完全な用意をしないと、よい結果は得られない。無益の努力を重

ねるばかりだ」と。意見が合わないの、高橋は口頭で申し出てから書面を出すという。お栄はまた蝦夷へと聞いて出奔。

隆朝は至時の意見に反対。忠敬宅に押しかけ「そんなことをして貰っては内覧していただいた方に申し訳がない」

高橋決断。定信の示唆を思いだし計画を変更。本州東海岸測量の申請を出すことにする。隆朝、忠敬納得。このたびは、早々と命令書がでた。しかも御勘定奉行から先触れが送られる。命令書の内容。

一九 第二次測量の旅

ルートを字幕で追う。歩測をやめ、徹底して縄を張る。方位をこまめにとる。富士を執拗に測る。銚子の大若岬で富士の実際の方位と地図を突き合わせる。下図の方位と実測方位がピッタリ合致して歓声。

伊能流測量術が完成した。このあと忠敬は先乗りして地元との調整にあたり、測量作業の指揮は親戚の若者平山郡蔵がおこなった。

松島から三陸の測量風景。陸路が不便なので海中にも縄を張る。

二〇 本州東海岸の地図完成

早稲田大学の図。堀田攝津守激賞。幕府官僚、伊能測量を評価。

東日本図を制作することになる。第三次測量では、勘定奉行より公用旅行として人馬無賃の命令が出る。先触れアップ、命令書の内容。

二一 第三次測量先触れの伝達

（刻付きの村継ぎ廻状の伝達風景）

伝馬役に勘定所より使いを出して先触れを渡す。使いは、「刻付き」と駆け込む。刻付きは昼夜を問わず伝達する緊急報である。

伝馬役は添え触れを作成し「御勘定奉行から御先触れが出た。刻付

きなので、受信時刻を請書に記し、昼夜を問わず継ぎ送れ。丁寧に扱
い汚すな」と指示し、廻状箱にいれ人足二人に千住宿問屋へ持たせる。

千住の問屋は二通筆写し、一通は自分用。一通は廻状用とし、汚す
といけないから写しを作って回覧すると添え状をつける。本物は封印
し廻状箱に収める。二人の人足に持たせて次の草加宿の問屋に送る。
夜中でも問屋場役人を叩き起こす。

問屋では同様に受信時刻を記入して廻状一通を筆写し、人足を起こ
して次に運ばせる。人足、駆け出す。

二二 第三次測量の旅

ルートを追う。奥州内陸部（白河から山形）を測る。名主が人足を
従え、山中の村境に出迎え。

経度の測定のため、能代で日食観測。天候が悪く失敗。日食観測風
景。セリフも入れる。

日本海沿いを南下。岩舟町では多数の人足が応援。善光寺に参拝。
帰府して下図、あら絵図の整理。地図はつくらない。

二三 第四次測量

ルートを追う。東海道の波打ち際を測る。郡奉行、町奉行、宿舎に
挨拶に出る。測量には同心が案内する。

尾張藩より挨拶の使者が立つ。岐阜では養老の滝を観光。

加賀藩、隠密がましいと判断。村役人とコンニャク問答。ただし、
預かりの幕領では藩士がキチンと応対する。

能登半島は大手分けして一周。平山隊頑張り、松波村で合同。

富山では地元の測量家・石黒信由と邂逅。隔意なく懇談。

糸魚川では、言葉がきつかけで事件が起こり、師匠から戒告される。

二三の二 糸魚川事件の復元

二四 下役、絵師を動員、東日本図を制作

針を使って下図の針穴を地図紙に写す。朱の測線を記入。沿道風景
図を見て風景を美しく筆写、絵付け。地名・記号を書き入れる作業。

制作中に高橋病没の報を聞く。忠敬一時虚脱。隆朝、間重富、活を
入れ制作を続行させる。桑原毎日見回り摂津守に報告。

二五 東日本図完成、全景と拡大図

大図六九枚、中図三枚、小図三枚、全てをある寺の本堂にならべる。

桑原隆朝、堀田攝津守と内覧し驚嘆する。ついで、閣僚の内覧に。定
信も見る。その場で西日本図制作の方針内定。

隆朝、摂津守の意をうけて、間と忠敬の意見も聞く。至時の息子・
景保も同席。忠敬辞退、間を推す。

間「とんでもない。あなたの仕事が認められたのだ。」「私は景保殿
の面倒も見なければならぬ」

忠「私も疲れた。西日本はよく分からない」

間「この機会を逃したら実測日本図を作ることはいけない」「頑張る
べきだ」

隆「そのとおりだ」

景「お願いします。父も喜ぶでしょう」

忠「至時先生には大恩がある。先生のことをいわれると断りきれな
い。先生はやれというだろう」

一同「そうだ。お願いします」

忠「やるとなると少し希望がある。個人の仕事としては大きすぎる。

お上の仕事としてやりたい。下役衆も手伝ってほしい」

隆「分かった。摂津守様に申し上げる。任せて欲しい」

二六 將軍・徳川家齊上覧

文化元年八月一日、朝から江戸城大広間に大図を並べる。忠敬、下役ら働いている。

老中・松平信明、堀田攝津守、作業を見廻る。一同平伏する。

信「よいよい。ご苦労だったな」

摂「伊能勘解由でございます」

忠「ははーあ」更に頭を下げる

信「なかなかの物だな。上様もお喜びだろう」

老中ら退席、忠敬ら作業続行。

將軍出座。地図閲覧。天文方・吉田勇太郎と至時の息子・景保が説明役。堀田攝津守補足説明。(忠敬は遙か彼方に平伏している)

文化元年九月一〇日、忠敬、城中で堀田攝津守から辞令を受け、小普請組に召し出され、天文方手付きを命じられる。給与は一〇人扶持。いよいよ西国測量計画始動である。

二七 西日本測量の命令が出る

文化元年二月二五日、堀田攝津守から景保に西国測量の命令が果たえられる。手付きの者を巡国させよと。

隊員の人選(景保と問答)にかかる。

内弟子、小者探し。面接と手紙。

二八 第五次測量に出発

先触れは老中より諸藩と沿道の村々へ。西国を三三ヶ月で一氣に測量の積り。大藩(細川藩)には江戸の留守居を呼び出して伝達。小藩

は触れ頭に。沿道へは村々年寄りにあて老中廻状を出す。本文朗読。

文化二年二月二五日出発。ルート図を追う。

荷物は船で品川へ。富岡八幡に参拝。品川で門出を祝う歓送の宴。

司馬江漢、会田安明、川崎まで送って泊り込む。

東海道を順調に進む。測量の行列風景。奉行、村役人の挨拶。大名行列。お茶壺行列に出会う。行列は苦手。紀伊半島の測量難航する。

二九 尾鷲で下役と衝突

忠敬が知らない間に、伊能隊から沿道に心得ぶれが流れ、準備がされていた。忠敬は誰が出したと怒る。

下役市野釈明、忠敬聞かず。市野、病気を理由に隊を離れる。

難航の埋め合わせに京阪で休養。京都御所を拝観。大阪では間観測所を訪問。大先輩・麻田剛立の墓に詣でる。

三〇 大船団による瀬戸内の測量風景

親船、料理船、茶舟、救助船、はしご船、わらじ船、雪隠船、作業船、飛船、飯炊き船など

三一 秋穂浦で発病、隊規乱れる

持病の「おこり」発病、移動しながらで病氣治らず。隊規乱れる。訴えをうけ、御徒目付ら監察。目付けに随行した徳島藩士・関権次郎より景保に内報がある。攝津守、景保を呼び出し(忠敬は)四国にも、九州にもいつてもらわねばならない大事な身分、これ以上不始末があ

つては困る。軽く注意しておくように」と天文方に戒告させる。(乱脈の具体例を、二・三例)

帰国後、忠敬慎みを伺う。景保の命令で、内弟子・平山郡蔵、小阪

寛平を破門する。申し渡しを受けたあと、雪の中、二人を佐原に帰す。忠敬は入夫のとき、平山家に恩義があり悲痛な事件であった。

三二 四国沿海測量

ルートを追う。徳島藩、測量家岡崎三蔵を綱引き足輕に潜入させる。忠敬に露見。岡崎謝る。そんなことならと測量を教える。習得した技術を国絵図に生かす。

三四 村方の受け入れ態勢と測量隊の日課

門番。不寝番。使者、付き回りの挨拶、村役人、町役人挨拶、完了地域からの御礼挨拶、書き上げの持参、打ち合わせ客、など多数の来訪者。贈り物の様子。

夜業は野帖の整理、下図の制作。星の高度の測定。

夜明けとともに測量開始。手分け隊は夜明けに作業開始位置につくため、夜中に提灯をつけて出発。

四国の帰途、奈良盆地の社寺を廻って観光と測量。元日には麻袴に威儀を正して、伊勢神宮を参拝。あとは江戸にまっすぐ帰る。

三五 九州へ(第七次測量)

ルートを追う。諸藩の丁寧な出迎えと進物。薩摩藩士延岡まで挨拶に出る。津久見で日食を観測。日食観測のやり方と意味を、忠敬が村人に語る形で解説する。

三六 幕府、屋久島、種子島測量を厳命

屋久島、種子島測量はたいへんならやめよう、という申し合わせで出発していた。忠敬は付き廻り藩士の意見を入れて、中止を進言した

が、幕閣は実施を厳命。薩摩の蜜貿易をけん制するためである。薩摩藩にも通達。忠敬は驚いたが、病人がいると称して、天草を測り、大分で越年してから、いったん帰府する。

三七 九州東南部の地図を提出する、間宮林蔵と再会

本図は限りなく正本に近い副本である。江戸帰着後、間宮海峡を発見し有名人となった間宮林蔵が忠敬を訪ねてくる。話し合ううちに意気投合、寛政一二年の師弟の縁を確かめ合う。

林蔵は蝦夷地の残部の測量を約し、食い扶持を持参して、忠敬宅に住み込み伊能流測量術を習得する。

三八 九州第二次測量(第八次測量)

九州城内ルートを追う。幕府の強引なやり方から薩摩への再度入領には不安があった。万一を思い、遺書を書いて出発した。隠居財産分配状がついている。伊能一族および間宮林蔵が品川まで見送りに出た。間宮はすぐあと蝦夷地残部の測量に出かける予定だった。忠敬は「間宮林蔵に与える序」を書いて渡し、弟子であることを明らかにした。伊能隊は総勢一九名最大の陣容で九州を縦断し屋久島・種子島に渡る。薩摩藩は大型帆船八艘を出し、留守居役が指揮官となって多数の藩士を連れて測量を支援した。

三九 福岡の国学者・青柳種信と意気投合

福岡では郡方の役人として、有名な国学者・青柳種信が案内に出た。志賀島出土の金印、宗像社縁起についての説明が至れりつくせりだったので、書付の提供を所望。

二回目、三回目の福岡入領では特に指名して、三たび交歓し、隣国

の国絵図など貴重な資料を貸与。公儀で地理資料編修のときは貴殿を推挙するとまで称える。

四〇 平戸侯測量模様を閲覧

忠敬が閲した大名、平戸侯、大村侯、五島侯

四一 副隊長・坂部貞兵衛客死

彦岐、対馬、五島の風物。副隊長・坂部貞兵衛過労のため、チフスを発病し客死する。忠敬、羽翼をもがれたと落胆し声が出ない。(手紙から経過を再現) 五島藩、三日間、歌舞音曲を停止して弔意を表す。

坂部隊、伊能隊の測量経路、発病した島・日の島の位置、風景。福江市宗念寺墓。福江城。

このとき、忠敬の長男景敬も死去。しかし娘妙薫、死没を知らせず。

四二 長崎の町を一日かけて測る

忠敬の測った道筋を追って要所の風物と解説。長崎市街観光測量の全貌、象も見ている。華麗な長崎大図(松浦史料博蔵)も写す。

四三 本州内陸部の測量

九州測量帰途の測量ルートを追う。出石、福知山。飛騨の高山。西国三三番の谷汲山。野麦峠を越え。再び善光寺へ。

四四 伊豆七島測量

ルートを追う。忠敬は老齢のため、参加を止められる。八丈島から三宅島への途中遭難しかける。

四五 体力衰える

江戸府内測量に孫忠晦をつれて見学。文化一四年、間宮林蔵、蝦夷地の測量データを持参して帰府。忠敬大いに喜ぶ。

見舞いに玉子三五個と蝦夷土産を持参。忠敬妙薫に卵の値段を聞く。

四六 忠敬急死

地図の上に伏す。遺言は以前から聞いていた「ここまでこれたのは高橋先生のお陰であるから、先生の墓側に葬って欲しい」しかのこらなかった。

死去の際は枕頭に、林蔵、景保、イネ、孫忠晦などがいたはず。気になることもたくさんあった筈。彼は用意のよい人。遺言がないのは急死である。桑原への礼がないのもおかしい。

景保は全てを含んで「今後のことはわしに任せてくれ。平戸侯など諸侯との約束もある」と摂津守の内諾を得て喪を秘し作業続行。すでない忠敬の名前で届けも出す。

四七 伊能図最終本の提出

景保、下役と孫忠晦を伴って登城。老中・若年寄の面前で西日本だけ閲覧に供する。正式な名称を「大日本沿海輿地全図」というさすがの江戸城大広間でも伊能大図二四枚はならなかった。

四八 源空寺に墓碑を建碑

最終本上呈後、喪を発し遺言に従って高橋至時の傍らに葬る。景保は父よりも立派な墓を、全ての費用を自ら負担してたてた。

伊能忠敬史蹟めぐり 1

函館山の伊能忠敬碑

記念碑のあるところは、函館山展望台施設の建物の壁面で、展望台に向かつて右側である。注意しないと見逃しそうな場所に設けられている。もともとは、頂上の展望台にはめ込まれていたのだが、昭和六十三年、山頂再開発のため現在の位置に移設された。来歴は次の通りである。

企画 函館市商工観光課（以下当時の肩書・氏名）
ブロンズレリーフ像制作

函館市立博物館長 武内収太 氏
日記文字揮毫 函館市長 吉谷一次 氏

製作

函館市内の石材店

設置年月日

昭和三十二年五月二十五日（除幕式）

碑の大きさ

横四尺五寸×縦三尺（花崗岩）

レリーフの大きさ・一尺七寸角（ブロンズ）

レリーフの右側には、寛政十二年五月二十八日の測量日記の一部が刻まれている。次のようなものである。

土用 朝五ツ迄曇る 夫

より 晴天 江戸出立後の上

天気なり 併し山々白雲お

ほし 箱館山に登て所々の方

位を測 夜も測量・・・

なお、忠敬はクナシリ迄の先触れを出し、大野村に向かう。

昭和三年二月二日の北海道新聞は、製作者の武内氏の談話として、

このレリーフは「忠敬坐像と、箱館山で測量して機械をのぞいている図を参考にして制作したもの」で、武内氏は自分の作品としては、会心の作と自画自賛していると伝えている。

（かとうこうじ記）



地域史料

対馬藩宗家文庫『測量御用記録』(二)

入江 正利

三月十三日 陰天 地南風夕方・雨天

已刻頃、測量衆乗船相見候由為到来、未刻頃着船

無程宿々江揚陸有之

引き続き、平戸藩の付廻役人牧山仁兵衛が揚陸し、浦目付・代官・庄屋・町年寄達が麻上下を着用して出迎える。

中村郷左衛門は早速牧山仁兵衛の宿を訪問し、大村藩との領境の受け渡しの際の出来事・測量衆への応対・御音物(贈り物)・服装等これまで不明であったことを質問し、親切に答えて貰う。その上で仁兵衛の案内で伊能忠敬の宿へ訪れて、領主対馬守よりの挨拶を述べ、若干の話の後、同宿の尾形謙次郎等内弟子衆へも挨拶を済ませる。

それから、別宿の坂部貞兵衛を訪れる。挨拶のあと、対馬について具体的に尋ねられたので、元禄の国絵図をひろげて説明する。同宿の他の下役衆にもこの絵図を見せたところ、

是迄ケ様之絵何方ニ而も見不申、

大村領之図、中々委敷候得共、是迄ニハ及不申候

と言われ、明日まだ対馬へ戻らないようであれば、嶽の辻へ上る予定なので、対馬が見えれば説明して欲しいとの依頼を受ける。

三月十四日については内容が非常に興味深く、様々な話が書き留め

てあるので、少し長くなるが紹介したい。

三月十四日 北風 雨天 昼・晴ル

昨日、測量衆懇ニ被申聞候付、今未明・股引着ニ而相加り、ケ様相仕廻居候処、雨天ニ而出立無之候付

已刻頃裏付上下着ニ而、勘解由殿御旅宿へ出掛り候処

本陣門前通繩引有之居候付、暫く立交り銘々江も

相應及挨拶、何レとも此服ニ而ハ御交り不得申候

勘解由様江御伺残も有之候故、先ッ罷上り可申旨

申置、相分レ候而参上候処、勘解由殿直ニ御逢有

今日ハ雨ニ風氣ニも有之、此雨天故下役斗差出候

自分ニハ保養いたし居候、能くとして御出被成候、ゆるりと

御物語申ニ而、御知人ニ可相成候て茶、多葉粉盆

出テ様々之御物語有之、皆々諸方ニ而の様子ニ而

昨日測量衆から遠望について頼まれたので、今日未明、股引を着て参加し(このあと意味不明)待つていたが、雨天で出かけないことになった。そこで裏付きの袴に着替えて、巳の刻(一〇時頃)に忠敬の旅宿に出向きました。

ところが本陣の門前通りでは、測量の縄引きをしていたので、測量隊に入り交じって下役、内弟子衆に挨拶をしました。しかし、何分この服装では作業現場に馴染まないのと、忠敬に伺い残したこともあるので、伊能様のところに伺う旨を伝えて、宿舎に参上しました。

宿舎では伊能様はすぐお逢い下されて、今日は雨天であるし風邪気味なので、下役だけでやつてもらって、自分は休養している。よくお出かけくださった。ゆっくりお話してじつこんになりましようとお茶、煙草盆などが出て色々諸方のお話など伺いました。

対馬国絵図は、伊能測量の約一〇〇年前に制作されたものだが、伊能図とよく似て精確な図として今でも評判が高い。その絵図を下役衆に見せたと驚いて、明日山に登って対馬を望見するので、付き合つて欲しいと頼まれ夜明けから股引をはいて身支度して出かけている。雨で望見が中止となったあと、袴をつけて忠敬に逢いに出かける。忠敬は機嫌よく逢っている。雨中の測量は、他でもほとんど出てこないが、ここではおこなわれている。珍しい例である。

対州之義、海路式百里余も可有之由、左候へハ本道二入念候時ハ百日余も可相掛候、左候而ハ大ニ御造作ニも可相成候段、何事も御談中日数少く相成候様ニ可

相心得、六十日位ニ而相済度候との義ニ付、国絵図あなた様ニハ

未た不入御覧候段、持参仕候段申述候処、見せ候様ニと有之

候故、取出し候処、差向ヒニ而夫々取廣ケ爰かしことて

委敷尋向一覽之上、成程委く御写候、昨日貞兵衛

申置候通すんとざつと□（不明）々切レニもいたし透写し

路程、海辺、泊宿之儘数など一々此絵図ニ而

よく相分り候様ニ御取斗有之候へ共、大ニ便利ニ而

事も手安く相捌ケ候、対州之義俗使砌りと申

何の御心遣之段も能く相心得罷有候、国ニ依而は

何とやら物堅く、薩州など入込し砌りハ甚六ヶ敷

候処、御自分之様成人分在て、双方よき様ニと

熟談いたし無滞相済候、

対馬の沿岸は二〇〇里もあるそうですが、丁寧に測ると百日もかかるでしょう。それではあまりにも御迷惑なので、何事も相談の上、日

数を少なくするようにして六〇日ぐらいで終りたいと仰せでした。

そこで国絵図をまだ伊能様にはお見せしてないが、持参しているとすると、すぐ見せて欲しいとのことなのでお見せしました。

差し向かいで広げ、ここかしこ詳しくお尋ねになり、一覽されたあと、なるほど詳しくお写しなされている。昨日貞兵衛からいつて来たとお（以下不明）で、この図によつて路程、海辺、泊宿が確定できるでしょう。大いに便利に事が捌けます。

対馬については、役人共がいうには、何事もよく心得ておいでなので心配はないということです。ですが国によつては難しいところもあります。薩摩は、たいへん難しいところでしたが、あなたのような人がいて、双方よきように熟談して相済みました。

（承前）

彼ノ種子島なとと

申スハ鉄砲之出所ニ而、大分開ケたる所かと存居

候処、拘無く案外成為鉢ニ而、第一米を作り

出ス事を嫌ひて民情と見へ、役人・色々下知も

有之候而も不相届シ急度及催促候へハ、稲の種を

田毎ニ植タことく二蒔ちらし候段、中をかき草を

取候事も不成候、夫を役人・及催促候へハ、草を取

真似をして、叱レハ逃げちらかすなど、扱食物第一ニハ

琉球芋是さへあれハと相好候由、一向塩を不食

魚の油ニ而野菜など煮たらちし魚食候様ニ

悦ひ候位の事ニ而、夫故ニ全鉢惣魚たらけ中々

咄しも尽されぬ為鉢ニ而候、ケ様成開ぬ所さへ

とやかくと相済来候、

かの種子島などというところは、鉄砲の出所で大分開けたところか

と思つていたところ、関係がなく案外な様子でした。第一に米を作るのを嫌う民情と見えて、役人が色々下知しても届かず、きつく催促すると、稲の種を田毎に植えたごとく撒き散らし、中をかき、草を取ることもできないようにします。

それを役人が催促すると、草を取る真似をし、叱れば逃げ出します。食物の第一は琉球芋、これさえあればと相好みます。一向に塩を食べず、魚の油で野菜など煮ちらし、魚と同じように喜んでたべます。そのため、どこも魚だらけです。このような開けない場所でもとにかく済ませてきました。

種子島を開けない場所の例にひいているが、種子島測量は薩摩藩が大船団を繰り出し、地元の種子島家は全島に告諭を發して、本藩と連帯し、面子にかけて測量支援をした場所である。忠敬の目でみた本音がこんなことだったとすれば意外である。

(承前)

対州辺鄙とハ被仰聞

候得共、右様ニハよも有之間敷と被仰候付、近頃以恥入たる義なら大分ニ似寄たる様子ニ而御座候

田作之御咄、下縣之方ハ連年作り覺候而、左様ニも無之候処、上縣ハ種子島ニ能く似申候、琉球芋を

対馬ニ而ハ孝々芋と唱候而、先ハ土地ニ合候と相見作得多きを悦ひ、田作ハ元ト甚田地少く水掛り不足

候而、作益薄キ所・甚匱略ニ仕候、昔・作り來候程を子々孫々相用、諸作益を失ひ候故、種子を

ゑらひ相渡し候へハ、一二年ハよく出来候とて悦候へ共無程化ケ種と相成候、其外少々可取開所も有之候へ共

民勢弱く農風荒々敷埒明キ不申、風俗ハとかく

朝鮮人の様ニ言語諸事甲斐々々敷義更ニ無之
縄引等之御手伝、いか斗り疎く可有之哉と申述処

対馬は辺鄙のところと聞いているが、まさかこんなことはないでしょうと、お尋ねなのでお恥ずかしいことですが、似たようなものです。

田作りの話は、下県のはうは連作していますが、上県では種子島とよく似ています。琉球芋は対馬では孝々芋といい、土地にあつたと見えてよくとれます。

田作りは、もともと田地がたいへん少なく、水掛りも少なくて、多く取れないので粗略にやっています。昔から伝えてきた種子を使っているのが効率が悪いのです。種を選んで渡しますと、一、二年はよく取れるので喜んでいますが、ほどなく「化け種」となります。

そして、この者たちに、縄引き手伝いなどできるだろうかと尋ねる。

夫ハ何方も初ハ其通ニ而候、ぼんてん持三四人を埒明

たる者御ゑらひ、扱中取十七人は又心得早キ

者をいつれも御領中追通しニ被召仕候へハ、人夫之仕り方勝手も宜く、実ハ減少之差引ニ相成申候

扱一行ニ何ぞ食物禁好無之、酒ハ全く御出し被下間敷候、未々迄下戸を召連置候、若忍而相求

候共、堅く御無用ニ而候、次ニ魚物は亦たのみ相好不申候、一行皆相好候ハ豆腐ニ而候、其外牛房

山芋、大根、青物之類何ニ而も此等之品皆好物ニ而候、且昼の小休所ニハ何成とも口中を養ひ

候様ニ被成可被下候、日々之立歩行ニ而候故、性力を付ケ不申候而ハ閑散取兼候、先ハ拘飯が宜く、又はぼた餅

或ハいか餅など私ハ成ものニ而宜く候、ぞふ志いも宜候

みそ二而もしやうゆ二而も少し相加り候へハ、卑胃の疲を

養ひ候、此等之義ハ御断も可申義を、此方・御注文

申スハ異ナ事ながら、何も御如在なく便利之處を

申ス二而候由被仰聞候付、随分相心得申候、御好之内

それはどこでも始めは同じです。梵天持ち三、四人よい人を選び、ほかに作業手伝い一七人、気の利いた者を集め、領内を通して召し使えば、人夫の作業効率がよくなり、測量日数の減少に役立つでしょう。

一行に食べ物の禁好は有りません。酒は全く出さないで下さい。末々まで下戸を召し連れています。もし内緒で要求されても堅く無用です。つぎに、魚類は好みではありません。一同の好物は豆腐です。それから、昼休みの場所には何でも結構ですから、腹の足しになるものをお願いします。

日々立ち歩いているので、精力をつけないと時間がかかりかねません。まづは握り飯がよく、ぼた餅、あるいは、いか餅（不詳）などがよいでしょう。私はなんでも結構です。ぞふ志いもでも結構です。味噌でも醤油でも少し加えてもらえば、胃の疲れを養うことができるでしょう。

これらは、お断りすべきであつて、こちらから申すのは異なことです。が、何事も如才なく、便利なようにと、お聞きしたので申し上げましたとのこと。随分参考になりました。

たいへん忌憚のない意見である。酒はどこでも無用とふれられたが、下郎が密かに金を払って求めたことは各地の記録に散見する。ここでみると忠敬は対馬入領の前には、本当に禁酒を命じていたことがわかる。魚は無用、豆腐が好物、昼飯は握り飯とは、離島に迷惑をかけないための心使いではないか。

豆腐之事二而候、先年巡見使之節、郷々御廻り相済

御上府之上卑胃直しと有之、豆腐を御好ミ被成候

如何ニと申スニ、田舎ニ而拵候、豆腐ハ殊外荒く、第一

堅く候而、葛ニ通し山越之土産ニいたし候と申様成

もの故、御廻村中ニ豆腐を差出不申候、此節など

嚙不調法ニ可有之と申候へハ、されハとて種子島

ニ而、豆腐屋の看板と見へ白キ角く成ルものニ、堅キ事

石のことくと書付有之、一笑いたし候、御国も左様ニ

候哉、是ハとふぞ御心遣ニ而数十日之間、時々給へ候様

ニ成可被下候、扱一行皆麦を好候と被仰付、夫とて

御安キ御用ニ而候と申候へハ、とろろ有之候ハ、とろろニ而

宜く候、又ハしやうゆにても宜く候、薬味など少々

加へ候へハ尚宜く候、野菜無之時節ニ相成候ハ、如何

哉と有之候付、其義ニ御座候、山芋、牛房など段々

無之、大根ハ秋大根之外作り出し不申候へ共、麦飯之

薬味位ひニハいたし方も可有之候、是等ハ如何様ニも

豆腐のことですが、先年、巡見使が郷々を御廻りになつて帰府のあと、卑胃直しと称して、豆腐をお好みでした。どうお考えですかと問うたところ、田舎で作られる豆腐は殊のほか荒くて堅い。葛にとおして山越しの土産にするような物で、廻村中豆腐は出なかった。

こちらにも不調法ですがと申すと、そうかといつて、種子島では豆腐屋の看板とみえる白く四角なものに、堅きこと石のごとくとあつたと一笑し、御国もそうですかと尋ねられました。どうか御心遣い頂いて数十日の間に、時々はお願ひしますとのことでした。

また、一行は麦をお好みと仰るので、お安きことと申し上げる

と、ところがあつたら、ところが宜しい。または醤油でも結構です。薬味など少々加えていただければなお結構とのことでした。野菜の無い時期になつたらどうするかとお尋ねなので答えました。

山芋、牛蒡などはだんだんなくなります。大根は秋大根しか作りませんが、麦飯の薬味くらいにはいたし方があります。これらは何とでもしますが。

可仕候得共、田舎向都而米を所持不仕候、不時之御泊

など二相成候村方二而ハ、殆当惑仕候由申述候処、其義二

御座候、いつ方二而も泊り村ハ兼而極りも有之候得共

其日測量之方理二依而ハ看々難引返、又先キ之

泊り二ハ程遠キなと申時ハとの様成、龜宅二而も

席無之候ハ、薄縁りを御廻し被成、其分二而不苦候

左様之義間々有之候、尤是ハ手先之者のミ

仮りの止宿二而候間、有合之俣二而随分宜く、成たけハ

左様無之様二可致旨被仰聞候付、左様之節なとちと

御ひもしき義、無之様成たけ心配可仕候、

田舎向きはすべて米を持っていまないので、(急に予定が変わって)急なお泊りなどになると、村方はどうしようもありません。と申しますと、どこでも泊まる村は予め決まっているが、測量の都合によつては引き返すこともできず、つぎの宿泊地も遠いというような場合、荒屋もないようなときは、薄縁を廻してくだされば結構です。そのようなことはまず無いとおもいます。尤もこれは手先の者のみの仮の止宿ですから、有り合わせのものでよく、そういうことのないようにしますとのことでした。

御懇意にお話いただいたので、色々なことを伺いました。(このあと

に重要な話がでてきます。中村郷左衛門はよくできていると誉められた対馬国絵図を利用して、測量をやめることはできないかと交渉するのです)

(承前)

扱々段々

御懇意二被仰聞候付、様々之義を申上候、此絵図如何

可有之哉、此度御先触之趣二付、海辺新二下夕繩

を引候而、或ハ島々周廻等迄申上候させ可申候処

御覽之通、入曲りたる渚など中々ニ着増之繩引を

可仕・ハ昔し之者共二ケ年も掛り候而、委敷相糺

置候、絵図六寸壹里二而壹里ハ三十六町二相極り故

壹寸ハ六町二而三百六十間、壹分ハ三十六間二而候故

さてこの絵図はいかがでしょうか。御先触れの趣にしたがい、海辺に新たに繩を引き、島々の周囲も測らせますが、御覽のとおり、入り曲がつた渚など人足を増やさないと出来ません。

(この図は)昔の者どもが二年もかかつて、詳しく糾したものです。絵図の縮尺は一里六寸で、一寸は六町、一分は三十六間となっています。

(つづく)

編集部注

本稿はこれまで未公開だった貴重な史料である。原文は釈文の部分が多く、読みにくかったので、執筆者の了解を得て、編集部として、渡辺が補足説明を加えたものです。

地域史料

伊能忠敬の江戸在住日記(五)

佐久間 達夫

(二四号より続く。今回から天気のための記述の日は省略した。)

九月二四日 晴天。本所石原、支配・根来喜内へ明細書、所書、持参罷越。それより浅草役所へ立ち寄り。

九月二五日 晴天。朝飯後大工町(桑原宅)、並びに佐藤修理殿、それより津田御屋敷へ立ち寄り帰る。

九月二七日 晴天。八ツ半頃廻状届く。

以廻状申達候。然者、来る一九日根来喜内殿初逢対可被致段被之聞候間、其元方服紗小袖麻上下着用喜内殿宅へ可被相趣候。尤、刻限の義は昼九ツ時揃旨廻状無違滞早々順達留りより可被相返候。以上。

九月二四日

浜江新之助

北本所表町大塚良助へ送遺候所、表町名主五郎左衛門店に住居これなく、所々相尋候所原庭町に住宅山本良助と姓を改て居候を尋て相渡す。使いのもの五ツ頃に帰る。

(名前を変えて居候をしているとはひどい話である。)

九月二九日 晴天。支配・根来喜内殿へ初逢対。

組頭へ四ツ半頃罷越、八ツ過に帰る。組頭出役故一同不出。

一〇月二日 曇天。午前より日本橋松川一方へ硯を預け、それより亀嶋桑原へ立ち寄る。八ツ半後より雨。

一〇月三日 晴天。高橋氏八ツ頃に来て暮に帰る。

一〇月四日 晴天。一〇月五日 曇天。

一〇月六日 晴天。普請 宮地弥十郎来る。

一〇月七日 白曇又晴。津宮趣飛脚へ久保木氏書状渡す。

一〇月九日 晴天。伊能三郎右衛門来る。

一〇月一〇日 伊能三郎右衛門暇乞をして江戸を帰る。

一〇月一一日 晴天。午前津田御屋敷より使簡来る。樋富菊郎より書状。八ツ後より段々曇天。

一〇月一三日 曇天。樋宮菊郎来る。蝦夷箱館調役下役庵原直一来る。間宮林蔵より羅鍼の儀、我等所持を念に無心致度申し来るに付、羅鍼二組相渡す筈。即代金五両請取。

(間宮林蔵に五両で杖先磁石二組を渡したことがわかる。)

四月二四日エトロのナイボ、同二八日同所シヤナへヲロシヤ人狼籍の相語る。間宮より伝言エトロフ役人御吟味役格にて調役菊池宗内。戸田又太夫、関屋茂八、児玉嘉内なり。其節菊池は箱館へ罷越し留主なり。間宮もエトロフに居るなり。去寅カラフトにてヲロシヤ人に連れられし松前源七というもののヲロシヤ人より日本へ送りし和語を言付られて書きしなり。此夜雨。

【注釈】

久保木清淵(一七六二—一八二九)

久保木清淵は、幼名を新四郎といい、家督相続後、太郎右衛門と称した。字は初め蟠龍、後に仲黙と改め、号は竹窓、竹陰等といった。

下総国香取郡津宮村(現佐原市津宮)に生まれ、少年時代、香取根本寺の僧松永北漢に学び、経学、書道に通じていた。忠敬の全国測量の地図作製に献身的に協力する。又、忠敬の肖像画の上部に記されている「賛」を書いたり、測量隊が携帯した「御用旗」も製作している。

忠敬が序文を寄せた「補訂鄭註孝経」や「香取私記」「論語講演集説」などの著書がある。文政二年八月二八日没。法名は「忠恕院至徳清淵居士」という。

久保木清淵が作成した御用旗



久保木清淵肖像
(安房神社蔵)



二、第六次測量を終つて江戸帰着から第七次測量出立の日まで(一)

原本

忠敬先生日記 二四

文化六年(一八〇九)一月一日(帰着日)

朝曇天。六ツ半後品川宿出立。善助、吉太郎、頭次郎途中にて分かる。坂部、下河辺、青木、各所々へ着届に立寄る。柴山は先へ行く。共に四ツ後浅草厩局へ着。荷物は直ちに永代橋を通り私宅へ遣す。同所にて中食し上野御成小路組頭浪江新之助へ罷越す。それより本所御頭根来喜内殿へ当着届を致し、七ツ後深川宅へ着。加納屋治兵衛、伊能三郎右衛門待ち居る。大野弥三郎来る。秀蔵来る。

(測量から帰着したときの模様である)

一月一日

朝曇る。飯高吉太郎、香取頭治、上総へ帰村に付暇乞に来る。伊能平右衛門(注19)も朝同じに来る。会田算左衛門来る。午後より堀田撰津守殿、並びに林家、佐藤捨蔵(注20)へ罷越す。桑原隆朝へ立寄る。七ツ後に帰宿。

一月二日

晴天。伊能三郎右衛門、大川治兵衛、津田御屋敷へ行く。下河辺来る。津宮久保木太郎八(注21)着。

一月三日

朝より晴。午後より浅草へ行く。吉田、山路へ届。それより浜町秋山松之丞へ立寄る。暮に帰

宅。朝食後会田算左衛門来る。

一月三日

朝より晴。坂部貞兵衛、柴山伝左衛門来る。午後佐原へ佐助帰国。

一月四日

朝曇。四ツ後より小雨。四ツ前桑原氏へ行く。雨天に付帰宿。

一月五日

朝晴天。此日より坂部、柴山、下河辺、青木、久助地圖仕立の初め。松野茂右衛門来る。

一月六日

朝晴天。伊能三郎右衛門、久保木太郎八、大川治兵衛、小網町迄越す。二七日朝出立。

一月七日

朝晴天。昼後高橋善助来る。

一月八日

同断。吉田、斎藤九郎右衛門来る。三十間堀七丁目永岡屋金兵衛来る。

一月九日

朝晴天。午後八ツ頃より曇る。伊能七左衛門、弓師正作倅永岡屋来る。深川善助添簡にて平助来る。此夜八ツ後大雨。

二月一日

晴天。朝飯後より岡村半平、野々山小右衛門、津田御屋敷へ行く。七ツ頃に帰る。

二月三日

朝より曇。永岡屋金兵衛、伊能七左衛門来る。

二月四日

晴天。初午。此日一同地圖休み。

二月五日

晴天。大風。下河辺休み。

二月六日

晴天。午後白木屋へ行く。近藤重蔵へ寄る。佐

原屋庄兵衛立寄る。此日も下河辺休み。飯高惣兵衛より華鯊魚IIカセイギヨ(鯨鯨IIアンコウのこと)届く。

二月七日

晴天。南西風。午後会田算左衛門、それより眼鏡屋(美の屋平六、眼鏡一ツ)へ寄り、高橋氏へ立寄る。大槻玄沢の子に逢う。夜に入りて帰る。此日も下河辺休み。

二月九日

同断。下河辺出勤。桑原善好、小林勝蔵、市野金助、青木御勘定所へ行く。

二月十一日

朝より曇天。昼後岡村半平来る。

二月十二日

朝より曇天。神保忠右衛門(注22)来る。

二月十六日

同断。此夜下河辺測る。

二月十七日

朝より晴天。昼、堀田撰津守殿内、山田綱治郎より書状。

以手紙致啓上候。春暖の節御座候。弥、御安全被成候入珍重之儀奉存候。然者、地圖の儀に付、得拝面度奉存候間、御閑日の程被仰下候。此段為可貴意如斯御座候。以上。

二月十七日

深川黒江町

堀田撰津守内

山田綱治郎

切封金

即返書致し、此方より僕を添遣し再報を得る。

二月十八日

朝より曇天。八ツ後堀田撰津守殿内山田綱治郎

来る。丑寅(五次) 測量の三分図(注 畿内中国地方沿海地図小図)を差出し候故に相談あり。

二月十九日

朝日曇。四ツ前桑原隆朝へ行く。白木屋へ立寄る。八ツ過に帰宅。山田綱治郎より文通あり。

以手紙致啓上候。誠昨日者(ハ) 参上仕、緩々拝話大慶不過之奉存候。然者、中国地沿海地図之儀被仰聞趣、委細攝津守へ申聞候処、此方控之儀者とても之事に四国九州地全備之上にて被差出候様被致度旨に御座候。

然に昨日も御面話候通、此節右地図具合申度奉存候に付ては、書写し儀御頼申入参上仕入用之所書写仕候敷。又者、右図御控数日御拝借も可被下哉。先者、此段承旨仕置度如此御座候。尚又、近日参上拝面萬々可得芳意候。

以上。

二月十九日 堀田摂津守内 山田綱治郎

伊能勘解由様

深川黒江町河岸通にて。

(編集部注 第五次測量地域の地図差出方法についての打ち合わせである。摂津守への控えは全部出来てからでよいといわれている。しかし、地図の出来具合を報告するため、一部を写させてくれるか、数日貸して貰えるか聞いている)

二月二日 晴曇。善八着。此日余寒。

二月二日

朝晴曇。桑原へ行く。それより堀田摂津守殿内山田綱治郎へ中国三分図持参。(注 中国地方

の小図は持参して貸し出している。それより松平土佐守殿、松平阿波守殿、雉子橋通小川町松平彦岐守殿、牛込御門内松平讃岐守殿、下谷御徒町加藤遠江守殿、浅草タンボ加藤出雲守殿へ国々廻浦の節御贈物の札に罷越し、手札(測量御用に付、御預分廻浦仕候節、御国産之所贈不致有被奉候よりの御礼。伊能勘解由) それより高橋御役所に立寄る。此日高橋氏安産あり。八ツ半後に帰宅。

二月二十四日

朝より晴天。朝濛気(モウキ)あり。五ツ後より出立。南八丁堀伊達若狭守殿国産贈物の札に越す。渋川主水へ立寄る。主水殿も善助に对面。それより愛宕下一柳因幡守殿、同松平立丸殿、虎御門外京極能登守殿、芝切通より赤羽根小沢権右衛門へ立寄る。それより麻布六本木京極老岐守、麻布罷出、伊達遠江守殿、青山百人町松平左京太夫、国々廻浦の節国産贈物の札に罷越し、七ツ後に帰宅。

二月二十六日 晴天。白木屋へ行く。

二月二十八日

晴天。午後津軽山鹿八郎右衛門、松野茂右衛門へ行く。それより産着持参高橋氏へ行く。尤、二七日書状にて此日饗応。

三月二日 朝より晴。午後浅草へ行く。

三月三日

朝曇る。七ツ後伊能三郎右衛門、橋替村名主平右衛門一同に來宿。午中前後晴る。それより曇る。

三月四日

朝曇る。此朝伊能三郎右衛門小網町まで下る。

三月一日

朝より晴天。小普請方甚右衛門見廻りに来る。

三月二日

雨天。午後高橋氏、市野金助御越し。八ツ後間氏御越し、七ツ後晴る。雨降る。

三月二日

晴曇。遠江、産根海量四ツ頃より来る。八ツ頃に帰る。弥三郎羅針を持来る。永岡屋金兵衛手伝大工三人連れ来る。此日より国郡分初む。

三月五日

朝晴曇。四ツ後より晴天。五ツ半頃桑原へ行く。四ツ半後に帰る。

三月六日

晴天。午後より小雨。佐原の安女来る。

三月二日

晴天。午後山田綱治郎地図を帰す。清今尺持来る。吾厘尺にて六寸〇二厘。古尺は金尺八寸一分なりという。

三月二四日

朝より曇。それより微雨。午後松平薩摩守野元嘉三次(注23)より使簡あり。

猶々先年九州表へも可被成御廻勤哉之節参上仕、大底之御積合承知仕置候得共、其節者中国辺より御帰府之由、此方領分へ御越し候程合も相知候はば、乍御面倒、又々一寸参上仕候而旁以相伺申度義も御座候間、究而不相知候共、御内々被仰知被下候様奉願候。

以手紙致啓上候。春暖之節御座候得共、弥、御安全被成御勤仕珍重奉存候。然者、先達而測量御用にて四国辺御廻勤被成候而御帰府被成候

由、左候へば、又々九州辺へも可被成御廻勤可被成候哉。

弥、於其儀、何比(イツゴロ)共御当地御出立にて薩州表へ何比御廻勤可被成候哉。凡之御考も候はば承知仕度奉存候。何卒大概之御程合にても御内々為御知被下候様奉願候。此段御頼為可得貴意如是御座候。以上

月日なし。松平薩摩守内 野元嘉三次
伊能勘解由殿 内用御直披(チヨクヒ)

三月二五日

曇天。七ツ頃海量来る。

三月二六日 朝より雨。同人来る。

四月朔日

晴。間五郎兵衛暇乞に来る。伊達若狭守内白井六兵衛来る。

四月一日

晴。間氏へ暇乞に行く。間氏曰(イワ)く。唐土二里百八十丈。一尺、吾邦の一尺五分五厘。清尺、和の一尺〇五分四厘。官尺、和の一尺〇六分。

四月三日 朝より晴。午後桑原へ行く。

四月四日 晴曇。夜晴天。文助測。間氏帰坂。

四月五日

晴曇。夜晴天。下河辺測る。芝山眼病不参。

四月九日 朝より晴。司馬江漢(注24)来る。

四月一〇日

朝より晴。ハツ半後より曇る。手島伊兵衛来る。文助現金三両送る。

四月二一日 朝より晴天。芝山出勤。

四月二二日

曇天。唐津水野和泉守家士・勘定吟味役田口弥三郎国図持来る。三十間堀七丁目永岡屋金兵衛案内。(伊能国図の依頼か)

四月一六日

朝晴曇天。夜雨。伊能七左衛門来る。

四月一九日

曇。午後浅草へ下図持参。七ツ後に帰る。七左衛門、市蔵来る。七ツ頃微雨。

四月二〇日

朝より小雨。七左衛門逗留。栄蔵来る。坂部風邪。

四月二二日

晴天。桑原へ行く。留主にて帰る。田口弥三郎地図持来る。

四月二三日

朝曇る。五ツ前より雨。桑原へ行く。

四月二五日

朝より曇。「上ケ図(テゲツ)」の初め。(提出図に取りかかるという意味か)

四月二八日 晴曇。午中を測る。

五月五日

朝より雨。四ツ後より止む。浅草へ端午祝儀に行く。馳走に成る。暮に帰る。夜雨。

五月七日

朝小雨。五ツ半頃より止む。伊地山与兵衛着。

五月八日

朝小雨。午後止む。暮に三治郎と乳母と安(ヤス)着。お里(リ)て、東士川老人(注25)は直ちに中橋へ行く。

五月一〇日

朝曇。九ツ後より晴る。薩州内留主居添役野元

嘉三次来る(薩州屋敷幸橋御門内装束屋敷に居るといふ)。ハツ後田口弥三郎来る。

注釈

(19) 伊能平右衛門

江戸時代の伊能平右衛門は、佐原村下宿(現佐原市下宿の小川薬局の屋敷)にあった。

平右衛門の後裔である伊能栄一氏は、佐原市新宿(小野川の西側)の氏神である諏訪神社(祭神建御名方神「タケミナカタ」ノカミ「大国主命」の子)の宮司をしている。

(20) 佐藤捨蔵(一七七二―一八五九)

佐藤捨蔵は通称で、名は坦、号は一斎という。昌平饗の儒者で忠敬と親しく、忠敬の墓碑文の撰や忠誨の命名のための仲介をする。

(21) 久保木太郎八

忠敬の漢字の師で、全国測量や地図作製に協力した久保木清淵の弟で、名は清緩といった。

幼名は金治郎、後伊兵衛といい、寛政二年分家して太郎八と称した。文化一四年六月六日、50才で没す。

(22) 神保忠右衛門

忠敬の父・貞恒の兄で、名は宗載(ムネノリ)といった。神保利右衛門家の七代当主で、俳諧をたしなみ、号を梅石といった。明和三年没。

(23) 野元嘉三次

薩摩藩士で、藩主より測量隊係を命じられ江戸の忠敬宅を訪問し、測量の日程を聞き国元に報告した。また領内測量中は付廻役として測量隊の世話をした。

(24) 司馬江漢(二七四七〜一八一八)

江漢は号で、名は峻、字は君嶽といった。延享四年江戸生まれ。洋画、銅版画作家であるとともに天文学者でもあった。寛政五年「地球全図略説」を著わし、地動説を紹介した。忠敬と親交が厚く、忠敬宅をたびたび訪問した。

(25) 東士川老人(小川省義(一七三四〜一八一四))

東士川老人とは、忠敬の長男・景敬の妻リテの父親・小川省義のことである。省義は、東士川村(現東金市宿)で栄秀の子として生まれ、一八才で村長(ムラオサ)となり、後に江戸北町奉行組与力給知差配役を長年勤めた。

初め下総国八日市場村の古作吉兵衛の娘津与(ツヨ)を娶り五女一男を生む。津与が死亡した後、上総国一宮村の吉野源七の姉・武津(ムツ)を後妻に迎え一女一男を生む。「リテ」は、省義・武津夫婦の第一子である。

省義が江戸の忠敬宅を訪れたのは七六才のときで、五年後の文化二年六月二日に八一才でなくなる。

文化六年(一八〇九)五月一二日

朝より曇天。関口藤兵衛来る。

五月一三日

朝より晴天。夜曇る。伊能七左衛門暇乞に来る。明日帰国の由。久保木太郎右衛門来る。

五月一四日

朝より曇る。神保庄作帰国。上総東士川老人御来越。海量老人、長岡屋来る。

五月一五日

朝より曇る。此日より栄蔵来る。

渋谷新之助より廻状。

以廻状申達候。然者、青山下野守殿被渡候御書付、其元方へ可相達旨根来喜内殿相達候に付、各御書付字迄通相達候。可被得其意候。廻状無滞早々順達從留可被相返候。以上。

渋谷新之助

五月一六日

朝より曇天。上田六郎兵衛来る。柴山(注30)風邪。

五月一八日

曇晴。桑原へお里(リ)て、三治郎(注26)を連れ行く。それより東士川老人旅館へ立寄る。此夜大曇。

五月一九日 朝より雨。五ツ半後より大雨。

坂部(注30)参らず病氣。

五月二〇日

朝より晴。下河辺(注30)へ行く。午後より伊能三治郎を連れ司天台へ行く。八ツ半後に帰る。此夜曇天。

(つづく)

一、言舌静かなる方。

一、左手彫物を灸にて消し跡これある。

一、其節の衣類、木綿紺地白古ぼん。鳴草物、同紺白すき織袴。同浅黄に紺にて鯉を染候襦袢を着し、紺小倉帯をなす。並びに材色手網染の三尺手掛をしめ罷有候。

右の通のもの於有候者、其所に留置御料は御代官、私領は領主地頭へ申出、それより江戸に於根岸肥前守番所へ可申出候。若し見聞に及候はば其段も可申出候。尤、家来、またもの等迄入念可遂吟味候。隠居脇より相知候はば可有曲事。

巳四月

研究会佐原支部見学会報告

間宮林蔵記念館を訪ねて

秋の朝八時半、バスは佐原市役所を出発した。十一月四日伊能忠敬研究会佐原支部の「間宮林蔵記念館と墓所の見学会」である。一行四十名は同研究会を中心として、歴史、郷土史に関心の深い人達の集まりである。

バスはまだ緑が鮮かな利根川堤防上の道路を進んでゆく。車中、香取禧良支部長の挨拶、成家さんの司会で自己紹介、となごやかに、順調に、予定通り間宮林蔵記念館に到着した。

丸い柱を二本建てただけの簡素な門を入ると、左手に茅葺き木造平屋建ての住居がある。正面に白亜のコンクリート一階建ての記念館という配置である。

住居の方は土間が広く、慥かに農家造りと見えた。丈は広さの割に意外に低く、平野の中で強風に耐える構造でもあろうか。

記念館では、林蔵の生い立ちについて映像により分り易く解説されている。各種の文書も多く、丁寧にみるには一日懸りであろう。研究会用意の資料を片手に、展示に学びながら、測量と探検、忠敬と林蔵の師弟関係、シーボルト事件等に思いを馳せて、一行は近くの墓所・専称寺へと向かった。

林蔵の墓石は小さな岡に杉や榎の小群の中にひっそりと立っていた。一行は懇ろに香華を手向けて墓参を終えた。

ワープステーション江戸。正午迄に場内を一巡する。江戸の下町の町並、住居を再現し、風俗・習慣等については映像、音響、照明の技

術によって紹介している。家族で楽しめる施設である。早朝出発で、お待ちかねの昼食はファミリーレストラン、そば屋で思い思いの食事となった。次のビール工場見学の予行演習をたっぷりとした人も居たようである。

アサヒビールの工場は現代科学を駆使して、原料・仕込み・発酵・貯酒・ろ過・ビン詰缶詰まで一環の流れ作業で日本一の工場だそうである。弥々地上六〇mの展望接待館での試飲である。出来たてのビールの味を堪能した。昼食の予行演習が効いたのか三杯目のお代わりをした者は居なかったようである。

帰途の車内、自己紹介の続きで、多くの人達から楽しい有意義な一日であった、と感想が述べられた。北田さんからは浄国寺小島一仁先生の下で進められている古文書学習会の紹介もあり、香取支部長の挨拶で締め括り秋の好日の研修会は無事終了した。

(林 記)



専称寺の墓地にある間宮林蔵
の質素な墓碑

お知らせ

伊能測量二〇〇年記念・伊能ウオーク記念

伊能忠敬銅像建立資金の募金について

伊能忠敬研究会 理事会

伊能ウオークは終了しましたが、国土地理院、測量・地図関係諸団体および土地家屋調査士会と日本ウオークキング協会・伊能忠敬研究会・朝日新聞社の間で、伊能ウオーク効果を永続的なものとするため、東京深川の富岡八幡宮に伊能忠敬の銅像を作ってはどうか、ということになりました。

富岡八幡宮は伊能忠敬研究会が第一回例会を開いた場所でもあります。二月二六日の理事会で協議の結果、これに参加することと致しました。そして、三月一五日には、関係諸団体の代表が深川の富岡八幡宮社務所において「伊能忠敬銅像建立実行委員会」を開催し、左記の趣旨で募金と建立計画を実行することに決まりました。

会員諸兄弟にはたいへん恐縮ですが、御趣旨に賛同いただいて同封の振替用紙にて御送金賜りますよう、お願い申し上げます。

伊能忠敬銅像建立趣意書

二〇〇一年三月一五日

伊能忠敬銅像建立実行委員会

1. 伊能忠敬銅像建立の趣旨

九八年に江戸東京博物館で開催された「伊能忠敬展」をきっかけに、



伊能忠敬研究会佐原支部 間宮林蔵記念館にて H12.11.4(土)

舞台劇「伊能忠敬物語」、「伊能ウォークの日本一周踏破」、土地家屋調査士会の一二七回におよぶ「伊能大図展」、「ふるさと発見地図コンテスト」や各地で開かれた伊能忠敬展、などによって、いまから二〇〇年前に、日本近代化の先駆けとして持ち前の熱意と根気で、日本地図を制作した伊能忠敬の人氣が高まっております。

隠居した事業家・伊能忠敬は、みずからの足で歩いて日本全土の実測をはじめ、一七年かけてその夢を実現し、はじめての実測による日本地図を完成しました。忠敬の地図は制作五〇年後の明治初期から本格的に使われはじめ、一〇〇年後の昭和初期まで利用された先見的な事業でした。

このたび、伊能測量開始二〇〇年を記念し、あわせて、伊能ウォーク日本一周踏破、測量法施行五〇周年、全国測量設計業協会連合会四〇周年、土地家屋調査士制度発足五〇周年などを記念して、伊能忠敬が測量旅行に旅立ちのつど、必ず参拝して無事を祈念した東京都江東区深川の富岡八幡宮に「伊能忠敬銅像」を建立しようとするものです。

趣旨に御賛同いただき、御協力をお願い申し上げます。

2. 設置場所

東京都江東区深川の富岡八幡宮境内の大鳥居の近くに設置します。

3. 富岡八幡宮と伊能忠敬の御縁

伊能忠敬の江戸の隠宅は、とうじは今よりも広大だった富岡八幡宮のごく近くにありました。

忠敬は一〇回の測量旅行を企画しましたが、第九回の伊豆七島測量を除くすべてに自身で参加して指揮をとりました。遠国に旅した第八回測量までの出発にあたっては、必ず、旅装を整え内弟子・従者をつれて、富岡八幡宮に参詣し、そのまま旅に出ました。

忠敬の測量旅行と富岡八幡宮はたいへん縁の深い場所です、伊能忠敬銅

像を建立するに相応しい場所と考えられます。

4. 資金

実行委員会参加各団体と、所属する法人、個人、関係団体、および一般有志からの浄財の拠出によりまかします。募金目標は二〇〇〇万円とし、募金額は、法人一〇二万円、個人一〇五万円を標準とします。別添の郵便振替用紙にてお振込みをお願いいたします。

5. 事業主体

御賛同をいただいた各団体の代表者により、伊能忠敬銅像建立実行委員会を設置してまいります。委員会の構成は別紙のとおりです。

6. 建立する銅像の概要

形態 立像 伊能忠敬が測量に出立する姿

規模 本体 二四〇センチ程度

彫刻家 酒井道久 伊能家7代目洋画家・伊能 洋氏推薦

付記：台座の付近に、新地球座標系による国家基準点の設置を検討します。

7. 完成目標時期

二〇〇一年一〇月とします。吉日を選んで、除幕式をおこないます。

8. 銅像建立にともなう行事計画

除幕式当日を第1回とし、毎年1回富岡八幡宮を起点として、伊能忠敬が測量開始前に歩測を練習した道（約一〇キロ）を巡ってウォーキング&歩測大会を開きます。毎年大会は忠敬が第1回の測量に出立した六月一日前後（出発日は旧暦の寛政二二年閏四月一九日です。陽暦では六月一日に相当します）に開催します。

実行委員会参加各団体は、構成メンバーに協力を要請するとともに、交代あるいは協力して行事を企画します。

9. 拠出者御芳名の記録

資金拠出法人・拠出個人には、入金と同時にしがきで受領証を送り、後刻、御芳名を永久保存する報告書に掲載するとともに、伊能ウオーの記録、その他各団体の記録と一緒に、銅像台座内のカプセルに収納して後世に残します。

別表 実行委員会の構成（予定を含む）

名誉会長 劇団俳優座・俳優

加藤 剛

会長（社）日本測量協会会長（京大・名誉教授）

中川 一郎

委員 富岡八幡宮・宮司

富岡茂永

（社）全国測量設計業協会連合会会長

鈴木俊之

日本土地家屋調査士会連合会会長

水上要蔵

（社）日本ウオーキング協会会長

田中康彦

（株）朝日新聞社文化企画局長

高木敏行

劇団俳優座代表取締役

古賀伸雄

（財）日本地図センター理事長

大竹一彦

伊能ウオーク協賛各社・団体代表・月星化成

植松俊明

兼事務局長 伊能忠敬研究会代表理事

渡辺 一郎

オブザーバー

国土地理院参事官

星埜由尚

富岡八幡宮の御由緒

（神社資料による）

御祭神 応神天皇（菅田別命）ほか8柱

沿革 富岡八幡宮は寛永4年（1627）、とうじ永代島と呼ばれる小島に創建されました。周囲の砂州一帯を埋め立て、社地と氏子の居住地を開き、今日の八幡宮の境内、深川公園、富岡町、門前仲町を含

む六〇、五〇八坪の社有地を得ました。以来、隅田川兩岸一帯（深川および中央区新川、箱崎地区）の氏子を始め、広く世間の崇敬を集めている江戸最大の八幡様で、「深川の八幡さま」として親しまれています。

徳川將軍家は源氏の流れを汲んでいるので、源氏の氏神である八幡宮を殊のほか尊崇し、將軍や一門がしばしば参拝、社殿の造営修理など手厚く保護しました。八幡宮周辺は江戸随一の門前町として栄えました。いまでも、毎月の1日、15日、28日の月次祭は縁日としてたいへんな賑わいを見せています。

深川八幡祭り

富岡八幡宮の祭礼は「深川八幡祭り」と呼ばれ、昔から8月15日を中心に行われており、江戸3大祭りに数えられています。「神輿は深川、山車神田、だだっ広いが山王様」とうたわれ、この3社の祭礼は共に百ヶ町以上の氏子町内を有し、寺社奉行直轄免許の祭礼でしたから、天下祭りと呼ばれました。

深川の神輿は「ワッショイ・ワッショイ」の掛け声と、沿道から浴びせられる清め水が特徴で「水掛け祭り」と呼ばれています。平成3年に重さ4トンの日本一の豪華な御本社一の宮神輿が奉納され、参道左側の神輿庫に展示されています。これを担ぐには400人必要です。

祭礼は本祭り、御本社祭り、陰祭りとあり、3年に1度づつ、それのお祭りが行われます。本祭りは八幡宮の神様を鳳簾にお移して氏子町内七〇キロを巡幸する神幸祭と、町内の二二〇基の神輿が繰り出し、各地区代表五〇数基が勢揃いして連合渡御が行われます。御本社祭りは、一の宮神輿に代えて東京一の、重さ2トン二の宮神輿が渡御します。陰祭りは、各町内の神輿が繰り出されます。

伊能忠敬研究会 御案内

- 一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方だけでなく入会できます。
- 二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

発表誌 年三回以上、交流誌 年三回以上

②発表会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等

入会を希望される方は、郵便振替の送金者氏名欄に住所、氏名、電話番号、FAX番号などを明記し、通信欄には専門分野、趣味分野、入会の動機、本会に対する希望など御意見を書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをすべてお送りします。

送金先 (室番が六一八に変更。乞御注意)

〒一六二 東京都新宿区下宮比町二の二八の六一八

伊能忠敬研究会

郵便振替口座 〇〇一五〇一六―〇七二八六一〇

投稿規定

会員は発表誌、交流誌に投稿することができます。一回の掲載は、原則として四頁です。越える場合は分載または、間隔をおいて掲載します。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任して下さい。原稿の状況はお問い合わせにお答えします。

一頁は二段組31字×26行、三段組20字×30行です。タイ

トルは五行分とします。写真、図表は大きさを考慮して下さい。

伊能忠敬研究会のホームページ

伊能忠敬研究会のホームページは二つあります。一般情報は大友常任理事の担当です。URLはつぎのとおりです。

<http://www.2s.biglobe.ne.jp/~utofinoh.html>

史料情報については、「伊能忠敬研究会資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、伊能忠敬関連史料リストなどが御覧いただけます。もちろん両者はリンクしています。

<http://www.city.fujisawa.ne.jp/~t-sakamo>

編集後記

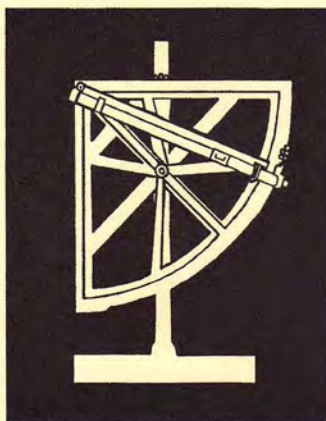
○本号は伊能ウォーク特集号とし、倍頁の64頁としました事務局幹事の協力で完全版下まで制作しましたから、経費的には予算を超えておりません。今後も64頁化ができるかどうかは、編集体制次第です。写真版と一部データ変換を外注しましたが、その他はすべてパソコン作業です。パソコン作業の協力者を求めます。

○伊能忠敬銅像の建立計画がすんなり固まりました。忠敬の隠宅に近い場所です。忠敬イベントの基地として期待できます。各グループが目標をきめて募金しますので達成は可能と考えています。会長は日本測量協会、事務局はウォーキング協会、事務局長は伊能忠敬研究会という連合体です。国土地理院が全面的に協力します。研究会の目標一〇〇万円です。おひとり、できれば二口以上でお願いします。(渡)

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.25 2001



ESSEYS

INOH Walks were Completed

SUZUKI Zen-ichi 1

SPECIAL EDITIONS FOR INOH WALKS WERE COMPLETED

Final Walk from Yokohama to Hibiya Park in Tokyo

2

Two Years of INOH Walking

8

History of INOH TADATAKA SOCIETY in Last Five Years

WATANABE Ichiro 16

Research Group by Primary School Boy

TANAKA Yoshio 19

MATERIALS 1

Reading Document in Sawara 7

KOJIMA Kazuhito 21

Survey of INOH along the Bo-So coast (3)

WATANABE Takao 27

TADATAKA and His Sword

ANDO Yukiko 31

Meeting between TADATAKA and HACHIOUJI 1000 peoples Samurai KATOU Kouji 36

INOH Yoko 12

FROM VISITOR' REGISTERS

INFORMATION FOR TADATAKA DRAMA PRODUCER

Best 50 Scene in Total Life of TADATAKA INOH

WATANABE Ichiro 40

HISTORICAL POINT OF TADATAKA (1)

HAKODATEYAMA monument

KATOU Kouji 50

MATERIALS 2

Document on INOH' TUSHIMA Land Survey 2

IRIE Masatoshi 51

Diary of INOH in Edo (5)

SAKUMA Tatsuo 56

OTHENEWS

62

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY